

公益財団法人KDDI財団 機関誌

# KDDI Foundation

vol.10  
APRIL 2019



KDDI財団設立

# 10周年 記念号

# KDDI財団 活動のあゆみ

KDDI財団は設立10周年を迎えました。

今回の10周年記念号では当財団活動のあゆみをお届けします。

60年以上の歴史をもつKDDIグループの国際協力事業、30年の歴史をもつ助成事業。

大きな2本の事業の柱は変わることなく国際社会の社会的課題解決に向けた貢献と、大きく変貌を遂げる情報通信社会の発展に寄与し続けています。

KDDI財団はこれまで世界中の国と地域で活動を行ってきましたが、これも数多くの皆様のご理解とご協力があったからこそこの活動です。

当財団が活動するカンボジアの学校事情も13年前の支援開始当初から大きく変わってきています。

プノンペン周辺と農村地域では大きな格差も見られます。

現地の事情に合わせた活動を行う必要性をひしひしと感じています。

小さな組織ですので、自分自身でやれることは限られていますが、

ステークホルダーの皆様のご支援、ご協力のもと、

今後も継続的に活動を続けていく所存です。



## 世界に広がるKDDI財団の活動(前身のKEC含む)

| アフリカ    | ヨーロッパ     | アジア          | その他       |
|---------|-----------|--------------|-----------|
| 1 チュニジア | 10 ロシア    | 28 シリア       | 47 スリランカ  |
| 2 ギニア   | 11 カザフスタン | 29 イラク(ヨルダン) | 48 マレーシア  |
| 3 ガーナ   | 12 キルギス   | 30 イラン       | 49 シンガポール |
| 4 エチオピア |           | 31 クウェート     | 50 インドネシア |
| 5 ウガンダ  |           | 32 カタール      | 51 台湾     |
| 6 コモロ   |           | 33 モンゴル      | 52 香港     |
| 7 ザンビア  |           | 34 中国        | 53 日本     |
| 8 ジンバブエ |           | 35 韓国        |           |
| 9 南アフリカ |           | 36 フィリピン     |           |
|         |           | 37 ベトナム      |           |
|         |           | 38 ラオス       |           |
|         |           | 39 カンボジア     |           |
|         |           | 40 タイ        |           |
|         |           | 41 ミャンマー     |           |
|         |           | 42 ブータン      |           |
|         |           | 43 バングラデシュ   |           |
|         |           | 44 ネパール      |           |
|         |           | 45 インド       |           |
|         |           | 46 パキスタン     |           |



アメリカ合衆国

大西洋

54

55

56

57

📍 コンサルティング 🛠 プロジェクト

オセアニア・太平洋

- 13 バラオ 📍
- 14 ミクロネシア 📍
- 15 マーシャル 📍
- 16 パプアニューギニア 📍
- 17 ナウル 📍
- 18 キリバス 📍
- 19 ソロモン 📍
- 20 ツバル 📍
- 21 パヌアツ 📍
- 22 フィジー 📍
- 23 サモア 📍
- 24 トンガ 📍
- 25 トケラウ 📍

中部・南アメリカ

- 54 メキシコ 📍
- 55 ペルー 📍
- 56 ブラジル 📍
- 57 パラグアイ 📍

02 巻頭エッセイ

**国際社会の持続的な発展に向けた  
10年を振り返って**  
～SDGsの目標達成への貢献～  
鈴木 正敏 理事長

04 エッセイ

**これからの社会づくりへの貢献**

佐々木 かをり  
株式会社ユニカルインターナショナル 代表取締役社長  
株式会社イー・ウーマン 代表取締役社長

06 KDDI財団 設立10周年記念座談会

**国際協力事業と助成事業を続けた  
10年間の社会貢献活動を振り返る**

伊藤 泰彦 / 安田 豊 / 渡辺 文夫 〈司会〉 鈴木 正敏

11 KDDI財団 10年のあゆみ

**1. 助成事業・表彰事業**  
助成事業 / 表彰事業

**2. 国際協力事業**

海外研修 / デジタルデバйд解消事業 / 海外コンサルティング / 途上国教育・文化・生活支援 / チャリティコンサートの開催

**3. ICT普及事業**

技術検定講習会 / 衛星通信年報

助成・援助対象者からの報告

20 ◎ 日本人留学生助成

**ハーバード大学大学院での  
留学生活に関するご報告**

武見 綾子  
ハーバード大学公衆衛生大学院 グローバルヘルス専攻

22 ◎ 外国人留学生助成

**Environmental Economics, Macroeconomic Analysis  
Based Hydroclimatological, Geological,  
Landscape Changes Produced  
By The Contamination Of Coal And Gold Mining.**

Paula Andrea Cano Bernal  
神戸大学大学院 人間発達環境学研究所

24 ◎ 社会的・文化的諸活動助成

**ネパール地方部における医療×ITの挑戦**

任 喜史  
特定非営利活動法人 ASHA 代表理事

26 ◎ 語学留学助成

**ミャンマーの社会の構造を知った10か月**

小峰 佳那子  
東京外国語大学 言語文化学部 ビルマ語専攻

28 2019年度 助成対象者

KDDI Foundation Awards 2018 / KDDI Foundation 奨励賞 / 特別枠調査研究助成 / 調査研究助成 / 日本人留学生助成 / 外国人留学生助成 / 語学留学助成 / 社会的・文化的諸活動助成 / 継続型社会的・文化的諸活動助成 / 国際会議開催助成 / 著書出版助成 / 海外学会等参加助成

32 KDDI Foundation Awards 2019のご案内

33 2020年度公募のお知らせ

# 国際社会の 持続的な発展に向けた 10年を振り返って ～SDGsの目標達成への貢献～



公益財団法人 KDDI 財団  
理事長

## 鈴木正敏

KDDI 財団は、国内外での助成事業を実施していた ICF(国際コミュニケーション基金：1988年設立)と、国際協力活動を中心に活動していた KEC(KDDI エンジニアリング・アンド・コンサルティング：1974年設立)の2つの財団の理念・資源を統合し、2009年に設立され、本年で設立10周年を迎えます。国際的視野のもと、わが国の内外において、情報通信の恩恵を広く社会に還元するとともに、情報通信による世界の調和ある健全な発展に寄与することを理念とし、設立当初から国際社会の持続的な成長に貢献することに専念して事業を推進して参りました。10年間の活動を振り返ると、設立当初に設定した「国際社会の持続的な成長に対する貢献」という使命は、色あせることなく、むしろ、2015年の国連サミットにおいて全会一致で採択された、持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のための国際目標、「持続可能な開発目標：SDGs: Sustainable Development Goals」に合致しています。

本稿では、KDDI 財団が取り組んできた国内外での ICT(情報通信技術)の普及・促進、教育文化支援の活動の中でも、長年継続してきた活動にフォーカスして SDGs と関連付けながら振り返り、「継続」から「持続可能性」へのさらなる発展について考えてみたいと思います。

## SDGs

SDGsでは、貧困・飢餓からの解放や健康と福祉、水と衛生の確保、教育の機会均等など、人間としての普遍的価値を国・地域・ジェンダーによらず全ての人々に提供し、幸せから「誰一人取り残さない(No one must be left behind)」という強い決意を表明しています。また、途上国だけでなく先進国の持続的な成長に必要となる雇用、経済発展、生産性向上、技術革新、エネルギーの確保、都市・住環境整備を開発目標としている点が、2001年に設定された国連ミレニアム開発目標 MDGs(Millennium Development Goals)から大きく踏み込んだ SDGs の特徴と言えます。企業活動そのものと SDGs とが密接に関係することが重要です。さらに、地球の豊かさを持続的に確保するため、気候変動に対する対策、陸上・海洋資源の確保、生態系の保護と平和な社会などの地球規模のゴールが設定されています。国連は、これらを合わせた全17項目のゴールと169のターゲットを2030年までに達成すべき開発目標と定め、日本を含む各国でその実現に向けた施策を策定しています。

この壮大な目標の実現には、政府機関や企業、当財団のような公益機関のみならず、学術関係者、NPO/NGO 並びに一般市民を含む全ての人々が、それぞれの立場で取り組む必要があります。

## 技術イノベーションと ICTの普及・促進

SDGsの達成のためには、経済、社会、環境、科学技術などのあらゆる分野の英知を融合・調和させる必要があります。社会を持続可能とするための重要な目標として、技術イノベーションがありますが、中でも ICT の果たすべき役割は極めて大きいものがあります。

技術分野では、それまでの技術が従来技術の延長線上にない破壊的技術の出現により主役の座を奪われ、その技術革新により世の中が飛躍的に発展することがあります。従来の電話に取って代わり、全世界に新たなコミュニケーションスタイルを提供したインターネットは、技術革新の代表例です。

また、継続的な技術進化により、当初は想像できないほどの大きな社会的インパクトをもたらす技術もあります。スマートフォンがそれに相当すると思います。固定電話が携帯電話に代わった当時は必要な時にどこにいても電話ができる手段でしたが、今や、スマートフォンはあらゆるコミュニケーション手段が統合されたコンピュータとなり、世界中の情報への自由なアクセスができるグローバルなパーソナルゲートウェイとなりました。さらに、常に誰かとつながっていることが安心感を与え、スマートフォンなしでは不安になるなど日常生活の心理面や人間関係にまで影響を与えています。ICT 技術は、ライフスタイル、働き方、経済活動など、私たちの社会生活を大きく変化させてきましたが、今後はさらにあらゆる産業分野に浸透し、社会全体への影響は益々拡大すると予想されます。

当財団では、ICF 時代から30年以上に渡り、このような革新技術や社会的価値の創造につながる技術を研究している理系の研究者と、急速な技術進展により影響を受ける経済、法律、社会学などの文系の研究者の両者に、バランスよく調査・研究の助成を行ってきました。これまでに助成した研究者の中には、ノーベル賞級と言われる量子と光のナノ構造の研究などの世界的な成果を出された先生もいらっしゃいます。今後も、破壊的技術の可能性のある基礎研究から社会的価値創造につながる研究開発まで、研究成果が持続可能な開発につながり、人々が安全、安心して利便さを楽しめる豊かなコミュニケーション社会の実現につながるよう、調査・研究助成を通して研究者を支援していきたいと思えます。

SDGsの目標の一つである国際間の不平等を解消するには、特に途上国のインフラ整備、教育、科学技術の底上げが重要となってきます。KDDI 財団は、グローバル・パートナーシップのもと、KECの時代の40年以上前から、カンボジア、ミャンマー、ネパール、モンゴルなどの数多くの途上国へ ICT 普及に向けた国際協力や支援を継続して参りました。今後重要になるのは、持続可能性です。プロジェクトが終了すると、それが将来へ向けた素晴らしい取り組みであっても、プロジェクトと同時にその取り組みが消滅してしまうことがしばしばあります。デジタルデバイド解消などのパイロットプロジェクトを「持続可能性」、すなわち、その国の自立による将来の持続的な発展へつな

げることが重要です。私たちは、現地政府関係者、自治体関係者、事業者等、NPO／NGOの皆様とのコミュニケーションをこれまで以上に密接にとり、ICTの普及を通して国際社会の発展に貢献できるよう、今後も努力したいと考えています。

## 人財育成と教育文化支援

いつの時代も子供たちが私たちの未来の社会を作りますので、将来を担う人財の育成は、持続可能性を考える上で最も重要な点の一つです。そのため当財団では、将来を担う子供たちの健全な成長に資する教育文化活動への支援にも力を入れて活動して参りました。

東南アジアの最貧国の一つと言われるカンボジアでの教育支援の例を紹介します。カンボジアは不幸な時代が長く続き、教育者や学校が大幅に不足しています。15年前のKECの時代から、チャリティコンサートの収益によりカンボジアに小中学校を建てる活動を継続しており、昨年11月に11番目のKDDIスクールが完成しました。開校式では、約300人の子供たち、教職員、村人たちの熱烈的な歓迎を受け(写真)、大変感激いたしました。それまでは古く小さな教室にぎゅうぎゅう詰めに座って勉強していた子供たちや教師にとって、新校舎建設は真に求めていたことであり、勉学環境の改善に役立てたことを大変うれしく思いました。今年は、カンボジアの子供たちが将来グローバルに活躍できることを目的として開始したパソコンと英語教室を、ほとんどのKDDIスクールに導入することができました。また、2つの小学校では今年1月から、正規の授業にはない音楽教室を定期的に開催できるようになりました。昨年12月にプノンペンで当財団が主催した音楽発表会「Music Makes You Smile!」にもKDDIスクールの生徒たちが参加しました。初めは楽譜も読めない子供たちでしたが、限られた時間の中で一生懸命練習した成果を、堂々と立派に発表することができました。子供たちの笑顔には達成感と喜びが満ち溢れており、私どもも、子供たちを大変誇りに思いました。この活動は、現地で熱心に活動されている先生と子供たちへの教育に対する熱い思いを共有し、先生との協力と信頼関係が初めてできることです。KDDI



たくさんの子供たちの出迎え。11校目のChamkar Doung KDDIスクール開校式

スクールがモデル校となり、将来カンボジアの学校でも音楽が正規授業になることをゴールに今後とも活動を継続して参ります。理事長に就任後初めてカンボジアを訪問しましたが、日本とは全く異なる環境の中で生活している純粋でまだ世界を知らない現地の子供たちと接していると、KDDI財団との出会いで経験したことが一生の宝物になるよう、今後とも応援したいと強く思います。今後とも、現地の声に耳を傾け、現地の人々に寄り添いながら、将来の持続的な発展につながるよう、教育文化支援を通して人財育成を継続していきます。

一方、途上国の将来の指導者育成につながる支援活動も持続可能性の観点からは重要と考えています。これまで、アフリカ、東南アジアなどの政府機関の方々に対するICT技術研修を50年以上継続的に実施しており、延べ約6,000人が研修に参加されています。受講者は、本国に帰り習得した技術を広める役割を担っており、10年、20年経過すると、日本で学んだ技術や仕組みを自国の政策決定に反映できる立場になります。影響力のある将来のリーダ育成の支援は、地味で長期的な取り組みですが、持続可能性を高める上では極めて重要です。

国内で長期的に継続している活動は、将来の科学技術を担う人財の育成のために中高生を対象として実施している理科教室です。自分でプログラミングしてロボットを操作したり、アンテナを作って微弱な無線信号を受信したりする実践的な実験教室は、子供の頃から科学技術へ興味を持っても

らいやすく、理科離れを防ぐ有効な手段です。この活動は、九州、中部、東北地方の大学の先生方のご努力により、前身のICFの時代から25年以上継続しており、参加者は3,000人を超えています。楽しそうに目を輝かせて、ワクワクドキドキしながら実験や成果発表をしている様子を見るのも喜びです。日本の将来の科学技術を担う可能性のある子供たちへの教育支援を継続し、さらに、他の地域へも発展させたいと考えています。

## おわりに

本稿では、SDGsと関連付けながらKDDI財団が設立以前から継続している技術イノベーションとICT普及促進活動、並びに、人材育成と教育文化支援活動を中心に紹介しました。KDDI財団は、全ての人々を笑顔にするため、グローバル・パートナーシップを強化しながら、今後とも皆様と共に、SDGsの目標達成に貢献して参ります。10年間事業を継続できましたのも、評議員、理事・監事、審査委員、政府関係者、学術関係者、現地NPO／NGOおよびKDDI関係者など多くの皆様のご理解と支援のおかげであり、深く感謝申し上げます。また、皆様と信頼関係と協力関係を築きつつ、現地の方々との人的ネットワークを形成しながら地道に活動を継続してきた歴代の理事長と職員各位に敬意を表します。引き続きご理解とご支援をお願いいたします。

# これからの社会づくりへの貢献



株式会社ユニカルインターナショナル 代表取締役社長  
株式会社イー・ウーマン 代表取締役社長

## 佐々木かをり

上智大学卒業後、通訳・翻訳等を提供する(株)ユニカルインターナショナルを設立(www.unicul.com)。2000年には市場創造のためのダイバーシティ・コンサルティング会社(株)イー・ウーマン(www.ewoman.jp)設立。日本初の数値化「ダイバーシティインデックス」を発案。また1,000人が集まる「国際女性ビジネス会議」を20年以上毎夏開催。ダイバーシティの第一人者でAPEC、OECDなど国内外で日英での講演も1500回を超える。日本初の時間管理術を紹介し「アクションプランナー」で手帳ブームをつくった。現在、上場企業等の社外取締役、内閣府、厚生労働省等の政府審議会等委員、世界銀行We-fi日本代表等を務める。著書多数。「ニューステーション」レポーター、「CBSドキュメント」アンカーなど歴任。現在も、テレビ、雑誌、新聞等のコメンテーターを務める。二児の母。

「国際コミュニケーション基金」という名称で理事就任の依頼をいただいたのが、現 KDDI 財団との関わりの始まりだった。私が起業した株式会社ユニカルインターナショナルが、通訳や翻訳を中心にした「国際コミュニケーション」コンサルティング業であったので、共通点があると思ったからだ。ご縁というのはありがたいもので、あれから10年以上にわたり、大切な財団の理事を務めさせていただくこととなった。

## コミュニケーションとは共有すること

「コミュニケーション」という単語は、日本語では「伝える力」と訳されることがあり、1箇所からもう1箇所に情報を届けるというイメージがあるように思う。しかし実際に、この単語を見てみると、コミュニケーションの「コミュ」の部分は、common(共有・共通)であるから、複数の人によって情報が共有されたり、複数の人たちが同じ知識や感情などを理解し合うことを意味している。情報を相手に渡すだけでなく、共に共有する、ということまでを意味している単語だと知れば、多くの人が今まで以上に「コミュニケーション」の重要性と力強さを感じるだろう。

どんなに深い学びや研究をしても、その論文や成果を、多くの人に活用してもらわなければ意味がない。他の人と、他の分野の人と、共有しなければ、研究は価値を生まないし、書いた人が納得のいく論文であれば良いのではない。読んだ人が理解でき、使うことができ、それによりさらに新しい研究や、他の研究とつながることができて、初めて、研究の成果になる。これからは、今まで以上に、組織も人も、コミュニケーションを意識して行くことが大切だ。

財団の事業の柱には「情報通信の健全な普及・振興と、社会の調和ある発展への貢献」や、国際協力事業による「国際相互理解の促進と、国際社会の発展に向けての貢献」、そして事業の中には、留学生への助成がある。これらは密接に関係しあい、これから社会を作る。その「これからの社会」をつくる基本的な考え方を三つのキーワードで示したい。一つが「コミュニケーション」であり、二つ目が「ダイバーシティ」、そして三つ目が「パッション」である。

一つ目のコミュニケーションについては、今書いたとおり、ICTを使って社会を発展させることも、国際相互理解を深めることも、それらに貢献するグローバル人財を育てることも、どれにおいても情報を共有するという意欲とコミュニケーションのスキルが大切で、知識や学びを共有し続けることで価値が高まる。

## ダイバーシティ時代

二つ目のダイバーシティというキーワードも重要である。ダイバーシティを女性活躍と間違える人が多いが、そうではない。ダイバーシティとは、多様な視点でものを捉え、複数の視点のアイデアを集め、より良い結果を導き出すことを言う。個人で言え

ば、今までと違う方向からモノを見る力であり、過去にとらわれない視点で考える力である。

簡単な事例で解説すれば、いつもお茶を飲んでいるカップは、カップでしかないと思いついていたものに、ある時花を活ければ花瓶になり、鉛筆を入れればペン差しになる。また、花瓶には花束をさすものだと思っていたけれど、あるとき、ただ一輪を挿してみると、それもまた美しいことに気づく。ある時は、醤油受けとして使っていた小皿に水を張り、道端の草を浮かべてみたら、これも花を生ける道具と変身し、素敵だという発見をするだろう。生活の中でも、研究の中でも、いつもと違う視点でモノを見たり、使ったり、試したりする力をもつことで、発見が生まれる。

上記の例を稚拙に感じる人がいるかもしれないが、これはビジネスでも研究の場でも置き換えることができる。入学試験の採点で女子学生を長年差別してきても、当該大学関係者は「いつも同じだったから」と疑問さえ持たなかったと記者会見した。企業の取締役会でも長年一緒に仕事をしてきた同じ年齢、学歴、家庭環境の男性たちが集まれば、一つの角度でしかモノをみることができない可能性が高い。研究も、同様だ。同じ分野の、似た経験の人たちで考えると、分析の仕方や、研究成果の活用方法、そして発表の仕方などで見落とす視点がある可能性が高い。

つまり、組織としては、多様な視点が常に飛び交うような健全な人員体制や風土をもつことが重要であるし、個人でいえば自分の脳を常に柔らかく保ち、新しいアイデアが入り込む準備をしておくことが大切なのだ。これらをダイバーシティと呼ぶ。

日本の教育では、知識を蓄積することの重要性や、質問に正解をもって答えることは訓練されてきたが、自らの視点で問題を見つけることや、他の人と違う視点を見つけることの価値、また、一つの答えがない問いに対して考え抜いて、それぞれの意見を合わせて議論して、良い答えを導き出すというディスカッションの仕方を学んできていない。常に複数の視点でものを考え、議論して、より良い選択肢を導き出すというダイバーシティ視点の習慣を身につけていく人材を育てることや、複数の視点から議論しながら動くダイバーシティ組織を作ることが、これからの有意義な社会発展に重要なのだ。

## パッションを持つ

さらに、答えが出るまで熱心に取り組む力や、出した答えを成功に導くために長期間熱心に取り組むことの大切さなども、あまり教えられることがなかったように思う。私が三つ目にあげるパッションは、これからの時代に人間が人間としての力を一番発揮することとなる要素だと思っている。

ICTが進み、AIが発達するこれからの時代。知識を蓄積するだけならAIの方が優れている。情報を集めて分析するならAIの方が短時間で結果を出す。人間に求められるのは、ただ研究を深くす

ることだけではなく、まず、どういった研究テーマを選ぶのかという豊かな視点をもつこと、そして研究過程で他の情報と掛け算しながら進む「ひらめき」、さらには、研究成果や発見を他の分野の情報などと「つなげる力」、そして、結果を生かして社会を良くしたいと強く願う志が大切になる。

この、社会をよくしたいと願う強い気持ち。人を大切に思う強い愛情。そういった「プラスの感情」が、マシンと違う、人間唯一のパワーであり、最大の魅力となるだろう。

国境がなくなるグローバル化の時代。この新しい時代に、必要なのは、人間の情熱だ。素晴らしいものを見て感動し、楽しい体験をして笑い、愛する人たちと触れ合う。心が熱く動き、震え、エネルギーを生み出すように生きて行く人間を増やしたい。その時間をたくさん持てるような人を育て、それらを満喫できる豊かな社会をつくるのが、目指す姿なのだろうと、私は考えている。きっと「情報通信の健全な普及」という財団の表現する健全という意味は、倫理観高い、そして熱いパッションから生まれるものだと思う。

## 「プラスを生み出す」という大目的を持ち続ける

ダイバーシティの時代は、一人一人が貢献する、という大事な目的がある。単に、社会に多様な人がいるとか、モノにはいろいろな見方があるということにとどまるのではない。ただ多様なものがあるというのではケイオスになってしまい、組織も社会も発展しない。ダイバーシティというのは、その組織、地域、国を構成する一人一人の人間が、所属するチーム、コミュニティを発展させるために、向上させるために、自らの違いを活用することに重要な目的がある。自分の存在により、プラスの成果を作るという目的意識をしっかりと持つことが大切なのだ。互いの情報が関わりあうことで反応を起こして、さらに大きな意味を生み出すということであったり、人間同士ならば、知り合い、関わりあうことで、互いの視野が広がったり、思考が豊かになったりするという変化を作り出すことである。

KDDI 財団で助成する研究は社会課題を解決するという大きな目的がある。留学支援をする人たちには、国境を超えて、ICTを活用して各地域の幸福度を高めることに従事してほしいという願いがある。今まで、一つ一つを熱心に支援してきた財団が、次の10年に向けては、新しい研究を進めることにとどまらず、過去、現在の研究成果や、関わった人たちを結びつけ、より多くの人たちが活用しやすいように実績発表のコミュニケーションを向上させ、さらにグローバル社会がそれぞれの魅力を生かして発展していくために貢献してほしいと願う。

私自身の理事任期は終了したが、財団の今後の発展と、社会貢献を継続して応援していきたいと思う。関わらせていただけたことに心から感謝している。

KDDI財団  
設立10周年  
記念座談会



## 国際協力事業と助成事業を続けた 10年間の社会貢献活動を振り返る。

2009年10月、KDDI財団は1988年設立の国際コミュニケーション基金(ICF)と、1974年設立のKDDIエンジニアリング・コンサルティング(KEC)を統合して設立され、さらに2012年4月からは内閣府所轄の公益財団法人として再スタートを切りました。今年の10月には設立10周年を迎えることとなり、それを記念して歴代理事長による座談会を開催。在任時に抱いていた事業に関わるそれぞれの思いを語っていただきました。

### 伊藤泰彦

1971年に国際電信電話株式会社(KDD)入社。代表取締役執行役員副社長、(株)KDDI研究所 代表取締役会長を歴任した後、2009年10月にKDDI財団の初代理事長に就任。KDDI(株)顧問を経て、現在は実家を改装して日本家屋の旅館を経営。外国人との交流を楽しんでいる。2004年紫綬褒章受章。

### 安田 豊

1975年に国際電信電話株式会社(KDD)入社。KDDI(株)執行役員・技術統括本部長、(株)KDDI研究所 代表取締役会長などを歴任した後、2014年6月にKDDI財団の二代目理事長に就任。現在は紀友会会長、FM田辺会長、シェアハウス経営など多忙な日々を送っている。

### 渡辺文夫

1980年に国際電信電話株式会社(KDD)入社。(株)KDDI研究所 取締役、UQコミュニケーションズ(株) CTO 兼務、(株)KDDI研究所 代表取締役会長などを歴任した後、2016年6月にKDDI財団の三代目理事長に就任。現在は公共・公益活動をしながら充電中。

〈司会〉

### 鈴木正敏

1984年に国際電信電話株式会社(KDD)入社。KDDI(株)研究開発フェロー、(株)KDDI研究所 取締役副社長などを歴任した後、2018年6月にKDDI財団の理事長に就任。KDDI財団の四代目理事長として、国際社会貢献活動を牽引している。2017年紫綬褒章受章。

### 理事長在任時の印象的な出来事

**鈴木正敏 現理事長 (以下鈴木):** 本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。今年、KDDI財団設立10周年に当たります。今日は皆さんに、財団運営に当たっていただいたそれぞれの時代のこと、感じていたことなどを自由にお話いただければと思います。

KDDI財団の事業の柱は国際協力事業と助成事業です。国内外において、情報通信の恩恵を広く社会に還元するとともに、情報通信による世界の調和あるいは健全な発展に寄与することを理念に、国際社会の持続的成長に貢献することを使命として社会貢献活動を展開しています。

初めに、伊藤さんにお伺いします。伊藤さんは10年のうちの半分の期間を理事長として務められて、現在のKDDI財団の礎を築かれてきました。財団設立当初、および公益財団法人化に向けて、様々なご苦労があったことと存じますが、組織を立ち上げて軌道に乗せるまでの中で、印象に残ったことなどがありましたらお聞かせください。

**伊藤泰彦 初代理事長 (以下伊藤):** 最も強烈な印象を受けたのは、2010年に、カンボジアのチョップスクールの開校式に行った時ですね。ガスも電気も水道もない大変な





左から：伊藤泰彦 初代理事長／安田豊 二代目理事長／渡辺文夫 三代目理事長／鈴木正敏 現理事長

聴く楽しみと同時に、社会貢献を考える場になっているのですね。そういった意味でも、一挙両得の正しいやり方だったのではないかと15年前にプロジェクトを始めた方たちに感謝しております。

**鈴木**：私も昨年末、理事長になって初めて開校式に行って、日本ではあまり考えられない様々なことに遭遇しましたし、子供たちの本当に喜ぶ姿を見て、学校建設は、現地の人々が本当に必要としていたことなんだと実感しました。

二代目理事長を務められた安田さんの時代になりますと、カンボジアに10校目の学校が設立され

環境でしたが、子供たちは伸び伸びと育っているのです。「国際協力事業はここから始めたい」と強く思いました。

チョップスクールは、アンコールワットのある都市からたった20キロ離れた所ですが、道路事情が悪くて車で3時間以上かかりました。車窓から見える家もどんどん様子が変わってきて、最初はごく普通の住宅でしたが、次第にトタンと板で囲まれた家になり、最後はトタンだけで屋根もあるかないかでした。そんなところに学校がぽつんとあって、本当にこれで大丈夫なのかと思いましたね。

その日は村人全員が出迎えてくれました。しかし小学校にいた16歳の女子生徒と話した時は胸が詰まりました。「何年生ですか」と聞くと、「1年生です」って言うんです。16歳まで小学校に行けなかったんです。これは黙って見過ごせないなと、社会貢献とかを通り越して思いました。

また、この『学校建設プロジェクト』はチャリティコンサートを開催して、その収入で遠隔地に小学校を建てるシステムです。コンサートに来られる方たちにはコンサートを

て、学校建設プロジェクトは一段落しました。その後は授業内容の充実に力を入れられたという印象があるのですが、その辺りのお話をお聞かせください。

**安田豊 二代目理事長 (以下安田)**：私は10校目の開校式に行ったのですが、初めて行って、なるほどこういう状況かというのがよく分かりました。本当は11校目、12校目と続けることもできたと思いますけど、カンボジアの中で学校が増えてきたこともあり、私たちが建てた既存の学校で何を教えるかがすごく大事と考えるようになりました。これまでも英語やパソコンの授業は一部の学校で行われていたのですが、絵画や音楽などの情操教育関係の授業はまったく実施されていませんでした。

そこで、シームリアップでカンボジアの子供向けの「小さな美術スクール」を主宰されている笠原先生にKDDIスクールに来ていただいて絵画教室をしていただきました。授業を始めると、子供たちがすごく喜んで絵を描くんですね。伸び伸びとしたい絵を描く子もたくさんいて、カンボジアの子供たちは本当に絵の才能があるなと思いました。その後、音楽教室もやってみようということになり、プノンペン在住の池田先生に指導をお願いしました。

絵画教室は、ミャンマーでも開催したのですが、非常に盛り上がりました。親御さんも子供の様子を見に来られて、自分も学びたいという人もいましたので、やはり情操教育は大事なんだなと思いました。しかし、一方では厳しい見方もあって、あまり余計なことを教えてほしくないという



開校式に出席した伊藤初代理事長



写真上: Skypeを通して絵の交流をする子供たちと笠原先生  
写真下: 音楽の授業をする池田さんご夫妻

意見もありました。子供たちがクリエイティブなことを覚えて、その喜びを知ってしまうことを歓迎しない人もいたとも言われました。これはかなり本質的な問題ですので、そういう見方があることもよく頭に入れておかなければいけないと思います。

とはいえ、絵画教室や音楽教室を継続することで才能を伸ばす子供たちも確実に増えていて、子供たちが描いた絵の画集を制作したり、池田先生が積極的に支援しているカンボジアのピアニストにチャリティーコンサートで演奏してもらったりすることもできました。やはり教育は、一過性のもので終わってはいけないんですね。絵画や音楽は今は日本人の先生が教えていますが、将来は現地の人々が先生となって子供たちに教えられるようになって欲しいと思います。

**鈴木:** 徐々にではありますが、最近はサステナビリティを意識した活動に広がりつつありますね。続いて三代目理事長を務められた渡辺さんにお伺いしたいのですが、渡辺さんの時代はミャンマーの大学のクラウドネットワーキングの整備や、その上でのアプリコンテストの実施、さらにはカンボジア・メコン地域の光ファイバーネットワークが完成しました。

安田さんの時代は、情操教育を主体にした文化系でしたけど、渡辺さんの時代になったら、ICT普及系の活動が主体になったという印象があります。実際に多くのプロジェクトに立ち会っておられますけど、その中で、現地で強く印象に残ったことなどがありましたらお話しください。

**渡辺文夫 三代目理事長 (以下渡辺):** 私が理事長に就任したときには、すでに教育・文化の支援活動が軌道に乗ってましたので、財団の柱事業の一つであるICT普及事業も一生懸命やろうと思いました。10年越しのプロジェクトだったメコン地域の光ファイバーネットワークを確実に完成に導かなくてはならないと思ったことも背景です。このプロジェクトがなぜ長引いているのか。それを調べてみたら、意外なことが見えてきました。遅延した理由は、契約上のことや工事に関する事など、我々から見たらおかしいことが多いんです。例えば、物がゆがんで付いてるとか、水漏れがするといったことです。契約書や仕様書に記載が無くても、日本的には、部品等はきっちり取り付けて、きれいに仕上げるのが当たり前ですが、それは必ずしも「常識」ではないと気付きました。

ということは、我々の常識で良かれと思って企画した支援や助成も、ひょっとすると、勘違いしてる可能性があるかもしれません。それを回避するためには、やはり現地の人々の立場に立ってやらなくてはいけないと改めて思いました。ですからICTプロジェクトなども、我々が何を支援できるかではなく、現地の人々が本当は何をやりたいのかを見極めながら丁寧に進めていきました。

例えば、ミャンマー大学ネットを整備するのは最終目的ではなく、ネットを活用する若者が育つことが本当の目標だと考え、アプリのコンテストをやることにしました。

数年後には我々の御膳立てではなく、現地の学生さんや大学の先生たちが、もっと自分たちにあったやり方でこのネットを活用していってもらえるようにと考え、継続可能な仕組みにすることを意識して活動していました。



アプリコンテスト審査委員会

KDDI 財団の活動状況をより多くの方に  
知ってもらうことが大切だと思います。

伊藤 泰彦 初代理事長

## 社会貢献活動に関して思うこと

**鈴木：**では次に、国際協力と助成事業の話を知りたいのですが、10年を振り返りますと、社会貢献活動の概念が、CSR（企業の社会的責任）からCSV（共通価値の創造）へと変化して、現在はSDGs（持続可能な開発目標）の時代となっています。

このような大きな潮流の中で、どのように舵を切っていくかが大事なポイントだったと思いますので、皆さんの時代はどうだったのをお聞かせください。まず伊藤さんの時代は、ICFとKECが行っていた社会貢献活動を、KDDI財団が責任を持って実施することを委託された立場だと思われていますが、当時の状況はいかがでしたか。

**伊藤：**あの頃はまだ社会貢献活動に対する認識がそれほど高くなくて、正直言って社内の関心は低かったですね。しかし先ほども話しましたが、現場の状況を自分の目で見てみると、CSRの概念とかは関係なく、普通の人間として何とかしなくちゃという気持ちになりました。

私と安田さんの時代は、大学や学校関係を中心に力を入れましたけど、渡辺さんの時代になって、国際協力関係をかなり見直されました。これはすごくいいと思うんですよ。海外の通信インフラに対する協力は、もう何十年もやっていて、KDDIの研修に出た人の数は約6,000人になっています。

ITU（国際電気通信連合）の仕事で海外を回ったときなどは、アフリカの人などから、以前にKDDIの研修で学んだという話をよく聞きました。もちろん中には、本国で偉くなっている人もいらっしゃるでしょうから、有形・無形の財産がたくさんできているんですね。ですから、国際協力や留学生支援の事業はサステナブルにつながっているんだと実感しました。

**鈴木：**数千人規模の研修は、短期的目標では、到底達成できないですね。特に教育は、長期的に見て継続することが重要なので、100年位のスパンで考えるべきことだろうと思っています。

現在のKDDI財団も自分たちの活動を浸透させ、現地の教育環境の整備に貢献したいと思っています。その際には今のカリキュラムにはない英語、音楽などの教科を教える



1～2校のモデル校を作り、そこに周辺の先生方や教育省の方が参加できる体制を構築して、教育カリキュラムの実験的な特区をつくれれば、横への展開が広がるのではないかと考えて取り組みを開始したところです。

**渡辺：**CSRからCSVとなり、SDGsというキーワードが出てきたとき、その一部に相当することは、我々はずっと意識してきたと感じました。17項目の国際目標は、なるほどなと思います。SDGsという用語のために活動しているのではなく、信念を持って地道に活動していると自負しています。サステナブルな開発目標よりも活動自体をサステナブルにできるかどうか問われているのではないのでしょうか。先ほどモデル校の話がありましたが、いかに継続的に、細くてもいいから長くやっていこうという発想が大切だと思います。

途上国への教育は一過性のものではなく  
サステナブルを意識した活動が必要です。

安田 豊 二代目理事長

**安田：**伊藤さんが最初からおっしゃっているように、やはり現地に行ってみることでいいですね。それまで机上の知識として思ってたことと、実際に行くと子供とかを見ると、これはもう全く違いますからね。

だからKDDI財団はそれを大事にしてきて、ICTの支援とかODA、ミャンマーのコンピューターネットワークも、全部現地の人たちと話をしながらやってきました。ただお金だけ出して、あとはお好きにどうぞというものではなく、直接自分たちが現地に行って活動してきましたので、これが間違いなく財産になっていると思います。



**国際協力の支援活動で求められることは  
現地の人の立場に立った発想です。**

渡辺 文夫 三代目理事長

### 今後の KDDI 財団に期待すること

**鈴木：**お話しを伺っていると、KDDI 財団が 10 年間行ってきた社会貢献活動の、根っここのところは同じだと思いました。これからも KDDI 財団は、営利目的ではない公益財団法人として、現地の人が将来自分たちでランニングできるようなところまで活動を継続していきたいと思っています。

では最後に、今後の KDDI 財団に対して望むことなどがありましたらお聞かせください。

**安田：**KDDI 財団は、カンボジアやミャンマーで子供たちの教育に力を入れてやってきましたが、これからは、もっと日本の若い人の役に立つようなこともできるのではないかと思います。今も KDDI 財団が日本の大学とタイアップして子供向けの理科教室を行ったりしていますが、例えば若い人たちにもっと情報通信技術 (ICT) を好きに

なってもらう、そんな活動も増やした方がいいと思います。

**伊藤：**私も教育に力を入れることは、一番いいのではないかと思います。そしてその活動を、ひとりでも多くの方に知ってもらうことも大切なことです。百聞は一見に如かず、皆さんに現地を視察していただくことが一番理解を得やすいのです。KDDI の人も参加できるといいですね。

**渡辺：**私には、道半ばでやれなかったことが二つあって、その一つは現地化です。我々の活動を 10 の力とすると、それをトリガーにして 5 年後 10 年後には 100 の力に広がっていくようなロードマップを作りたいかったです。そしてもう一つは、伊藤さんもおっしゃっていたより多くの人を巻き込むことです。1 回でもカンボジアやミャンマーに行けば、現地の状況がよく分かってもらえるので、ぜひ実現してほしいですね。

**KDDI 財団は今後も教育と ICT を中心に  
継続的な社会貢献活動を続けていきます。**

鈴木 正敏 現理事長



カンボジアやベトナムから KDDI 財団に贈られた感謝状を手にする歴代の理事長たち

**鈴木：**私も見ていただくことが重要だと思っていますので、今後は視察メンバーの公募なども考えていきたいですね。2泊3日ぐらいの出張ですから、それほどハードルは高くないのではないのでしょうか。

これからも KDDI 財団は、国際社会の持続的な発展のために教育と ICT を中心にして、地道な努力を続けながら貢献していきますので、皆さんには引き続き、ご指導いただければと思います。本日は長い時間ありがとうございました。

# 1 GRANT ACTIVITIES/AWARD PROGRAM 助成事業・表彰事業

情報通信の普及・振興に向けて幅広い貢献を目的として多岐にわたるプログラムを運営しています。  
助成規模は、KDDI 財団の前身である ICF に遡り 2018 年 3 月末時点で、1,788 件 2,384,552 千円となります。

## 01 助成事業

事業開始当初は、NPO への活動支援として、「社会的・文化的諸活動助成」、大学研究者への助成として「研究奨励金」、国際会議開催への援助として「国際会議開催助成」を設けました。

NPO への活動支援については、2016 年度より「社会的・文化的諸活動助成」で活動した団体の中より、KDDI 財団の趣旨に適った活動を推進する団体に対して、「継続型社会的・文化的諸活動助成」プログラムを設けています。

大学研究者への支援は「調査研究助成」としてプログラムを継続しています。

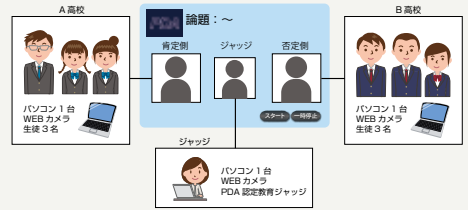
「国際会議開催助成」では、会議の規模を問わず、ICT の振興に寄与する会議を優先的に助成しています。

光センサ搭載ロボットによるライトレース実験 (九州大学)

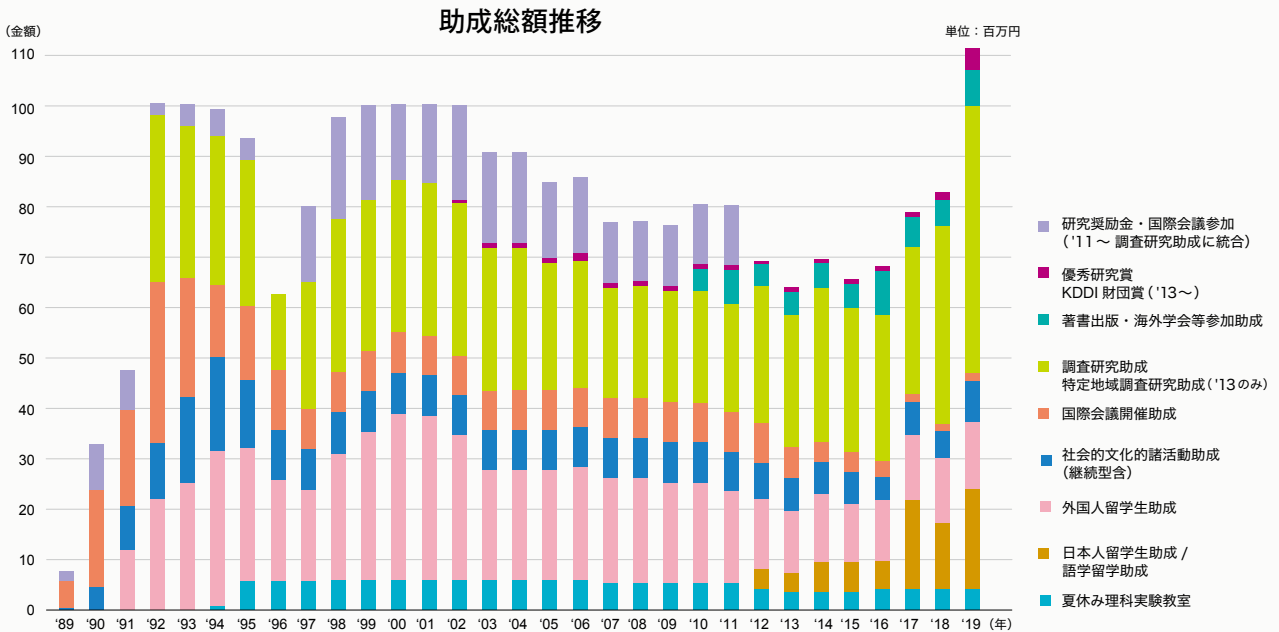


学生への支援プログラムとして、事業開始まもなく「外国人留学生助成」を開設しました。さらに対象を充実すべく、2011 年度には、国際的視野に立ち、幅広い国際間交流の振興、調和ある健全な世界の発展への寄与を目的に、海外留学を志す日本人大学院生を対象に「日本人留学生助成」、2016 年度からはアジア・殊にミャンマーおよびその周辺国の発展に貢献することを目指し、ミャンマー語(ビルマ語)を現地で習得する大学生に対し「語学留学助成」を開始しています。

構築した遠隔ディベートシステム



青少年の人材育成を目的としたプログラムとして、中高生を対象とした「夏休み理科実験教室」を東北大学、名古屋大学、九州大学で開催しています。2019 年度からは北海道大学、広島市立大学へ拠点を拡大します。また、新たに英語によるパラメンタリーディベートを通してグローバル人材育成を推進する PDA(パラメンタリーディベート人材育成協会)に対しても助成を開始します。



## 02 表彰事業

2002 年度より、優秀な研究者の社会顕彰を目的とし、「調査研究助成」で助成した研究の中より、優れた成果をあげた研究を表彰するものとして「KDDI 財団賞 (2012 年度まで：優秀研究賞)」を開設しました。

2016 年度からは、KDDI 財団賞には及ばないが、将来的に期待できる研究を表彰する

ものとして「KDDI 財団審査委員奨励賞」を設け、研究者の活躍を支援してきました。

2018 年度より、従来当財団の助成対象者に限られていた「KDDI 財団賞」を廃止し、公募による「KDDI Foundation Awards」を新設、応募対象を国内全ての研究者に拡げています。



表彰式・贈呈式

KDDI財団賞受賞者リスト (2009～2011年度\*までは「優秀研究賞」として表彰)

\*所属職位は受賞当時のもの

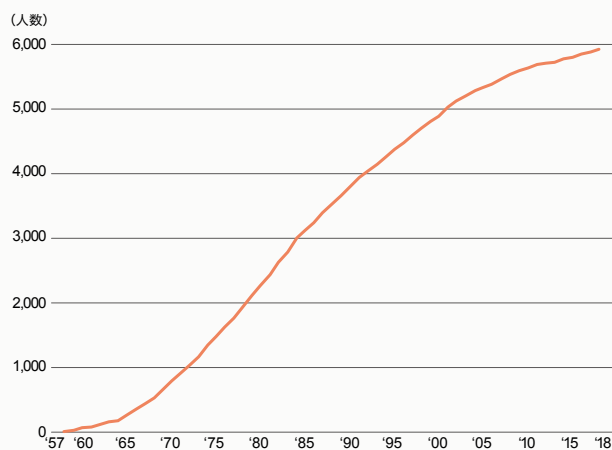
|        |                                                                            |                                  |
|--------|----------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| 2009年度 | 無線ネットワーク上のデータ管理機構の研究                                                       | 原 隆浩 (大阪大学 准教授)                  |
|        | 光通信波長帯光 RAM に関する国際共同研究                                                     | 河口 仁司 (奈良先端科学技術大学院大学 教授)         |
| 2010年度 | オーバーレイネットワークにおける自律分散型トラフィック制御                                              | 笠原 正治 (京都大学 准教授)                 |
|        | 電波曝露による生体内電力吸収と温度上昇                                                        | 平田 晃正 (名古屋工業大学 准教授)              |
| 2011年度 | モバイルインターネットサービスの利用に関する動機付け、コピキタス環境、情報ネットワークに関する研究：国際比較視座からの考察              | 岡崎 伸太郎(マドリッド・アウトノマ大学 准教授)        |
|        | 高信頼アドホックネットワークに関する研究                                                       | 加藤 寧 (東北大学 教授)                   |
| 2012年度 | Practical Aspects Of Channel Estimation In Relay-Assisted Wireless Network | 安達 文幸 (東北大学 教授)                  |
| 2013年度 | 超高密度光通信用 CW テラヘルツ光源                                                        | 小山 裕 (東北大学 教授)                   |
|        | 高スループットを実現する符号化変調および再送方式に関する研究                                             | 落合 秀樹 (横浜国立大学 准教授)               |
| 2014年度 | ヘルスケアのための生体信号解析ネットワーク                                                      | 小谷 潔 (東京大学 准教授)                  |
|        | カーネル学習と超高分解能ビームフォーマ法                                                       | 湯川 正裕 (慶應義塾大学 専任講師)              |
| 2015年度 | カーボンナノチューブ量子通信素子の基礎研究                                                      | 加藤 雄一郎(東京大学 准教授)                 |
| 2016年度 | 該当者無し                                                                      |                                  |
| 2017年度 | 干渉合成開口レーダの位相特異点発生機の機序                                                      | 廣瀬 明 (東京大学 大学院工学系研究科・電気系工学専攻 教授) |

2 INTERNATIONAL COOPERATION  
国際協力事業

01 海外研修

KDDI財団が実施する海外研修は、開発途上国への技術移転の一環として1957年にタイのテレコムキャリアから2人の研修生を受け入れたのが始まりです(その当時はKDDが実施)。各国のテレコムキャリア向けに行っていた研修はやがて同じテーマを学ぶ様々な国の技術者を集めた集団研修としてJICAやAPTが主催する研修を請け負う形となり、現在は最新技術の紹介なども取り入れた興味深いコースを企画・実施しています。衛星通信、国際電話、インターネット、光ケーブル技術、セキュリティ等、時代によってニーズは変化します。多くの講義はKDDIの専門家が行っており、研修生に好評です。

研修員数推移(1957年～2018年)



\* 2014,16,17年はマンマーMOTC研修を含む。



① 海外研修生の皆さん ② Raspberry Pi(PCボード)を使ったIoTサイバーセキュリティトレーニング ③ 実習準備 ④ 山口衛星通信所視察 ⑤ グループディスカッション

## 02 デジタルデバインド解消事業

国際社会におけるデジタルデバインド解消に有効な通信方式の提案と教育・医療などのアプリケーションによる実証実験を国際機関「APT (Asia Pacific Telecommunity、アジア太平洋電気通信共同体)」および実証実験先の現地国と連携して、2002年からこれまでに世界14カ国で35のデジタルデバインド解消プロジェクトを実施してきました。さらに当財団独自のデジタルデバインド解消プロジェクトにも取り組んでいます。今回はこの10年間に取り組んできたプロジェクトを紹介します。

### ■ バングラデシュ

- 2014 モバイル環境でのアプリ活用
- 2016 情報共有と作業効率化のため農業支援アプリの研究

### ■ ブータン

- 2011 山岳国における WiMAX アクセス網導入・展開に関する調査
- 2012 ルーラル地域における広帯域網の最適化のためのパイロット構築と実証評価

### ■ カンボジア

- 2009 インターネット利用のために無線 LAN リンクの障害復旧
- 2010 遠隔診療・教育のための広域 WiFi 網での PC・機器監視システムの実証実験

### ■ マーシャル

- 2010 離島での衛星回線を利用したフェムトセル通信に関する調査研究
- 2011 離島での衛星回線を利用したフェムトセル網のパイロット構築
- 2013 光ファイバー融着技術と通信量増加の研修

### ■ ミクロネシア

- 2009 島嶼間衛星通信でのルーラル地域への ICT センターのパイロット導入 (3 州) と研究
- 2012 離島への健康管理・遠隔診断・緊急連絡の確立のための VSAT 活用テレセンターのパイロット導入と継続的運用政策の研究

### ■ モンゴル

- 2012 自国衛星打上準備のための、衛星の活用・打上げおよび運用の調査・研究
- 2015 遊牧民の暮らすルーラル地域への VSAT 活用によるブロードバンド・インターネット接続実証実験

### ■ ミャンマー

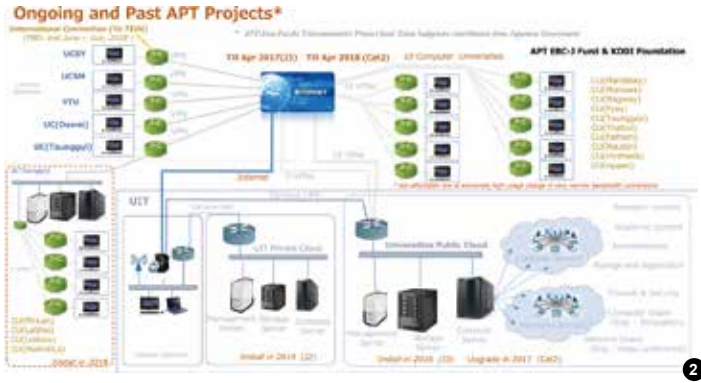
- 2011 モバイル通信と ICT 技術に関する研究
- 2014 大学高等教育のための学内クラウドコンピュータシステムの構築と実証研究
- 2016 コンピュータ系大学を結ぶパブリック・クラウド・システムのパイロット構築プロジェクト
- 2017 サイバーセキュリティへの防衛手段を含む全国的なコンピュータ大学を対象とする学術クラウドシステムのパイロット構築

### ■ ナウル

- 2012 低品質なインターネットでも活用できる ICT センター (図書を含めたリソースセンター) 設置に関する調査
- 2013 政府 LAN の信頼度と速度改善を目的とした、光ネットワークの計画・敷設・運用とリソースセンターのパイロット構築



①マーシャル：プロジェクトメンバーと完成式典で。後ろは導入された衛星アンテナ  
 ②マーシャル：メジット島の滑走路での機材積降ろし③マーシャル：離島での鉄塔建設作業④ミクロネシア：島の皆さんと運用開始式⑤ミクロネシア：村への道がないためボートで機材を運ぶ⑥ミャンマー：アプリケーションコンテスト



■ ネパール

2018 西部山岳地域への廉価な光ファイバー網の導入・運用のためのパイロット構築

■ フィリピン

2010 広域 LAN と携帯網活用による情報共有とビデオ会議のシステム構築と寄贈

■ タイ

2016 災害救急医療の改善のための標準化とシステム構築調査

■ ベトナム

2009 SNS の特性を活用した e ラーニング・システムの開発実証実験

2011 視覚障害者が活用できる ICT センターの構築・実証実験

2014 M2M とクラウドによる山岳地域の鉄砲水早期警報システム開発と実証実験

2015 大気汚染・交通渋滞などの交通課題低減のための低廉なバス向け交通監視システムの開発と実証実験

■ ミャンマー

ミャンマーのコンピュータ系大学のレベル向上のため、上述の2014年度/2016年度/2017年度のAPTプロジェクト並びに当財団からの寄贈により、20大学を接続した大学教育&研究用クラウド環境が構築されました。当財団は、上述の3つのプロジェクト完了後も、本クラウド環境を共同構築してきた大学関係者等、これまでに構築した人的ネットワークを活用し、ミャンマーの大学教育におけるICT人材育成とICTインフラ改善に貢献するための継続的な支援として、以下のような財団独自プロジェクトを実施しています。



APTクラウド・セキュリティ講義

● 大学生向けアプリコンテスト

『ミャンマーの社会課題を解決すること』をテーマに、2017年度は18大学の特定のコンピュータ大学と工科大学が参加し大学生向けアプリコンテストを実施しました。優勝チームEASY-QはJPHACKS2018に特別招待され、優勝アプリについて特別講演しました。2018年度は教育省傘下でIT系学位を提供している全大学(46大学)が参加します。

● APNIC 財団との共催によるインターネット技術研修

ミャンマー学術ネットワーク(mmREN)の発展に寄与するため、APNIC財団と共催で2018年度より開始しました。

● 九州大学/ヤンゴン第一医科大学等3校との遠隔医療教育デモ

大学の質の向上に大学間ネットワークが非常に効果的であることをアピールするため、日本の医療技術の展開を継続的に行えるように、日本の大学病院の支援を受けて、また、近隣のコンピュータ大学の技術的な支援を取り付け、ミャンマーの医科大学3校と九州大学を同時多元接続し、ビデオコンファレンス形式で医療の遠隔教育のデモを実施しました。

①ミャンマー：APTクラウドネットワーク構築作業 ②ミャンマー：APTプロジェクトにて構築した20大学を接続する大学研究&教育用クラウドネットワーク ③ナウル：架空工事 ④ナウル：オレンジのユニフォームでファイバー自前工事 ⑤ネパール：パイロットプロジェクト・光ファイバーネットワーク ⑥ネパール：低価格工法対応光ファイバー ⑦フィリピン：携帯網を活用したPC情報共有システム



## ネパール

ラリトプール市学校でのeラーニングシステムおよびプログラミング教育の導入(2018年度)に着手しました。教育NGOの支援を得て、2018年度に、ラリトプール市の小中学校3校へeラーニングシステムを導入し、楽しみながら基礎学力を向上する取り組みを始めました。また、問題解決力や論理的思考を育成するため日本を含む世界各国で取り組みが始められているプログラミング教育について、ラリトプール市・シティネット・OLEネパール・宮城教育大学と連携し、2019年度から取り組みを開始する予定です。



eラーニング授業



1



- ①タイ：日本でのドクターヘリ活用の視察
- ②ベトナム：百年前から使用している点字印刷機（盲学校にて）

## 03 海外コンサルティング

KDDI財団の前身・KEC (KDDI Engineering and Consulting, Inc.) の頃より、海外の通信関連のコンサルティング業務を開発途上国を対象に提供しています。(提供対象国についてはP1の世界地図参照のこと)

### カンボジア国メコン地域通信基幹ネットワーク整備計画 ODAプロジェクト〈CP-P5〉(2007年度～2018年度)

本プロジェクトは、カンポンチャンから首都プノンペンを経てシハヌークビルに至る光ケーブル基幹伝送路(460km)、プノンペン市内のメトロリング(30km)、並びに光アクセスラインを主要都市に構築し、最新の次世代通信システムを導入したものです。当財団はプロジェクト実施機関(テレコムカンボジア)のコンサルティングを担当しました。

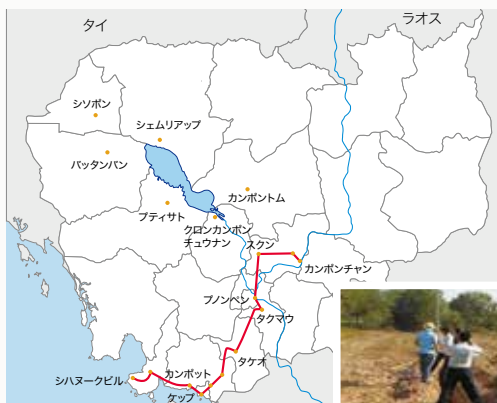


通信機器(GE-PON)の単体受取試験(PAT)

#### 担当者より

本プロジェクトの終結には約10年という年月がかかりました。その主な理由は、①カンボジア国の通信規制機関(TRC/Telecommunication Regulatory of Cambodia)の設立に4年を要し、その設立までシステム発注ができなかったこと、②工事を受注したジョイントベンチャーの経験と能力の不足による工事遅延でした。一方で、TRC設立までの4年間における技術の進歩に合わせて詳細仕様の再設計ができたため、システムの機能面では大変恵まれました。

### カンボジアプロジェクトの光ネットワークルート



光ファイバー敷設



開所式典(勲章授与)

**イラク国主要都市通信網整備ODAプロジェクト  
〈IQ-P17〉(2013年度～2017年度)**

本プロジェクトは、イラク国の首都(バクダット)に、最新の次世代通信システムを導入して、バクダット市内の通信網の整備・拡充を行うものです。KDDI 財団は、コンサルティングチームの一員として、IP 関連設備のコンサルティング業務を担当しました。

**担当者より**

このプロジェクトの推進に大きな影響を与えたのは、『当該国への入国制限や当該国での活動制限』でした。受注ベンダーや私たちは、隣国のヨルダンやトルコ等数カ国に跨ってプロジェクトを実施する必要に迫られました。一方、プロジェクト期間内に要望された機能変更をしっかりと織り込むことができ、高度な機能を提供することができました。

**ブータン国緊急時通信体制整備計画準備調査ODAプロジェクト(2016年度～2017年度)**

本プロジェクトは、災害に対してより強固な携帯電話の通信設備の整備を主な内容とする「緊急時通信体制整備計画」を策定するための準備調査です。当財団はこの調査を実施する共同企業体の一員として参加しました。本計画の想定は、首都ティンブーにある第3世代携帯電話(3G)に対応した既存機材を別の都市(ジャカールを想定)に移設してバックアップ設備として活用し、新たに整備する機材をティンブーに設置してメインシステムとして活用するものです。



## 04 途上国教育・文化・生活支援

KDDI 財団の途上国教育支援は 2005 年に始まりました。

子供たちに明るい未来を!との想いにより文化支援や生活支援と活動は広がっています。

**教育支援**

**カンボジア学校建設**

KDDI 財団の前身、KEC (KDDI Engineering & Consulting Inc.) の創立30周年を記念してチャリティコンサートを開催し、そのチケット売り上げ等でカンボジアに小学校を建設したのが支援の始まりです。

建設した学校には課外授業としてパソコン教室と英語教室を導入し、教師の給与も提供しています。

この活動は10年間続き、カンボジアのルーラル地域に KDDI スクールが10校建てられたところで、校舎建設には一旦ピリオドを打ちましたが、2018年、財団設立10周年を記念して新たに第11校目となる Chamkar Doung KDDI スクールが建てられました。開校式には生徒や教師の他に村の人たちも大勢出席し、新しい校舎の完成を祝いました。



パソコン教室 (Chheu Teal KDDI スクール)



1校目に建設された Phom O KDDI スクール



11校目の Chamkar Doung KDDI スクールで、一人一人に文房具をプレゼント

## ソフト面での支援

2014年からは、これまで建てた10校の校舎メンテナンスや英語・パソコン教室の改善、さらにカンボジアの授業カリキュラムにはない美術や音楽の授業を行うなど、ソフト面の充実を図ることとしました。

美術ではシェムリアップの「小さな美術スクール」による絵画クラスや、日本人アーティストによるオートマタ（からくり人形）教室の開催、音楽ではプノンペンの Neak Poan School of Music による授業や東京交響楽団のメンバーによる音楽ワークショップなど、どれも子供たちの目を輝かすものでした。音楽の授業は今後2校のKDDIスクールに絞って定着化を図っていく予定で、2018年にはプノンペンのイオンモールで開催された音楽イベント「Music Makes You Smile!」でピアノ演奏を披露するなど、様々な挑戦をしています。さらに体育の授業としてカンボジアサッカー1部リーグに所属する Angkor Tiger FC のメンバーによるサッカークリニックや運動会を行いました。選手たちのリードにより大いに盛り上がり、広いスタジアムには歓声や笑い声が絶えませんでした。

## ミャンマーへの展開

カンボジアでの教育支援を情操教育の導入に方向転換したのと同じ時期にミャンマーでの教育支援も始めました。ミャンマーでの支援先は New Zero Art Village School です。ここは放課後、美術を中心に英語、パソコン、ミャンマー語の授業を提供するプライベートスクールで、最近では村のコミュニティスペースとしての役割も果たすようになってきました。子供たちの絵は即売会で売れるようになり、個展を依頼される生徒も出ています。また2018年度からは音楽教室も始めました。新年会では初めて人前で演奏を披露するまでに上達しました。



絵画教室



オートマタ教室



Music Makes You Smile! に出場



運動会で綱引き

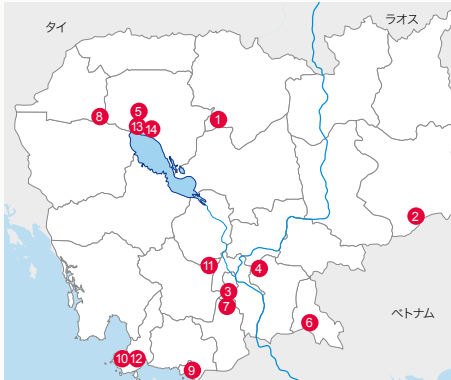


サッカークリニック



ミャンマーのギタークラス

## ●カンボジアの支援先と支援内容



|                                                   |                              |
|---------------------------------------------------|------------------------------|
| ① The Phom O KEC School (ボムオ KEC 学校)              | PC/ 英語・音楽教室                  |
| ② The Sre Preah KEC School (スライプリア KEC 学校)        | PC/ 英語                       |
| ③ The Phnom Dei KEC School (ブンダイ KEC 学校)          |                              |
| ④ The Sanlong KEC School (サンロン KEC 学校)            | PC/ 英語・音楽ワークショップ             |
| ⑤ The Chop KDDI School (チョップ KDDI 学校)             | PC/ 英語・サッカー教室 / 運動会・スバエクトム上演 |
| ⑥ The Chhue Teal KDDI School (チュエティール KDDI 学校)    | PC/ 英語・サッカー教室・スバエクトム上演       |
| ⑦ The Yeam Khao KDDI School (ヤムカオ KDDI 学校)        | PC/ 英語・音楽教室                  |
| ⑧ The Khy Lek KDDI School (キイレック KDDI 学校)         | 美術教室・スバエクトム上演                |
| ⑨ The Phnom Touch KDDI School (ブンタウ KDDI 学校)      | PC/ 英語・美術教室                  |
| ⑩ The Samdech Euv KDDI School (サムデック・オー KDDI 学校)  | PC/ 英語・交通安全教室                |
| ⑪ The Chamkar Doung KDDI School (チャムカードン KDDI 学校) | PC/ 英語・音楽教室                  |
| ⑫ シアヌーク州 O Tra Chek Chet 村                        | 井戸寄贈                         |
| ⑬ Ty Chean 一座練習場兼劇場                               | 練習場兼劇場寄贈 一座紹介 DVD 制作         |
| ⑭ 小さな美術スクール                                       | 絵画集、絵本製作、オートマタ教室             |

文化支援

カンボジア伝統芸能の大型影絵芝居(スバエクトム) 継承支援

カンボジア文化支援として、内戦で途絶えかけたカンボジア伝統芸能の大型影絵芝居(スバエクトム) 継承・復活を目指す Ty Chean 一座への支援を行っています。

2014年には雨期でも練習や公演ができるようにと、練習場兼劇場を寄贈しました。

KDDI スクールの校庭でスバエクトムの上演を行うことで、一座に芝居上演の機会を提供するとともに、子供たちに自国の文化を知ってもらおうといった試みを行っています。

スバエクトムを鑑賞してそれを題材にして絵本を作るプロジェクトには「小さな美術スクール」の生徒たちが挑戦し、すばらしい絵本が完成しました。

2018年度にはスバエクトム影絵制作から上演風景までの様子、歴史や一座インタビューなどをDVDにまとめています。実際の上演の様子は、バンティミエンチャイ州にある Khy Lek KDDI スクールで実際に上演した際に撮影しました。DVDの完成は2019年5月を予定しています。



Ty Chean 一座練習場兼劇場



絵本原画を持つ子供たち



スバエクトム野外上演

05 チャリティコンサートの開催

2005年にカンボジアの学校建設を目的として始めたチャリティコンサートは今も年に1回のペースで継続的に開催しており、チケットの売り上げは全て途上国の教育支援に充てられています。

コンサート会場ではKDDI財団の様々な活動を紹介するスペースを設け、ご来場の皆様にご覧いただいています。

また、2018年には、KDDI財団も支援しているカンボジアの若き音楽家を支援するプロジェクト「Catch a Cambodian Star」のコンテストの優勝者、チューオン・ソサニーさん(ピアノ)を招聘するなど、コンサート自体も途上国支援の一助となっています。



コンサートで演奏するチューオン・ソサニーさん



◎チャリティコンサートクラシック 2019 開催

チケットの売上や募金により開発途上国の子供たちの教育支援を行う。

- ・日 時：2019年3月6日(水)
- ・会 場：紀尾井ホール(千代田区紀尾井町)
- ・出演者：指揮=太田弦、フルート=高木綾子、ハープ=景山梨乃、オーケストラ=東京交響楽団
- ・曲 目：モーツァルト：歌劇「フィガロの結婚」序曲、フルートとハープのための協奏曲ハ長調 K.299、ドヴォルザーク：交響曲第9番「新世界より」

## 01 技術検定講習会

高度情報化社会の推進に貢献するため、2006年より、「モバイルシステム技術検定講習会」を一般向けに毎年春秋2回開催しており、実施回数は50回を超えます。この他に企業等からの要望に応じて個別の講習会も実施しています。モバイルシステム技術検定はIT関連業務に従事している方々やモバイルシステムの業務に携わる方々を対象に設けられた制度で、モバイルシステムの提案、構築運用改善をより効果的、効率的に行うために必要となる技術知識・情報の習得を狙っています。

上記に加え、2017年より、社会や産業に新たなイノベーションをもたらしているIoTについて、技術要素を体系化したIoTシステム技術検定の講習会を開催しており、実施回数は10回となっています。IoTシステム技術検定は、IoTシステムの企画、構築、活用、運用改善をより効果的、効率的に行いさらに高付加価値化の創造を生み出すために必要となる技術知識を習得し、さらにこの分野における優れた技術者として活躍していただくことを狙っています。



モバイル講習会の様子



モバイルとIoTシステム技術検定の教科書

## 02 衛星通信年報

衛星通信年報は、KDDI財団を編集事務局とし、衛星関連の主要企業が編集委員となり、1966年（KEC時代）以来、継続刊行されてきたものです。

この衛星通信年報は編集発刊費用不足により2010年度版を持って

休刊となりましたが、衛星関連事業に関わる企業・団体から復刊を望む声と寄付金が寄せられ、2012年度版から復刊しました。

これからも衛星通信および関連分野に関するわが国唯一の総合的な年報として、衛星通信年報を継続発行します。

### ●衛星通信年報の表紙(衛星)で振り返る10年

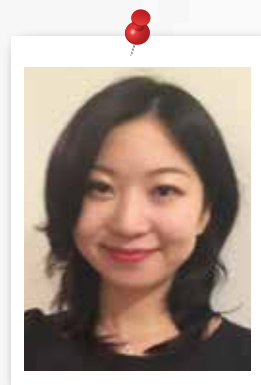




# ハーバード大学大学院での 留学生活に関するご報告

ハーバード大学公衆衛生大学院 グローバルヘルス専攻

武見綾子 Ayako Takemi



## 大学院と研究生活

2018年9月より、アメリカのハーバード大学公衆衛生大学院グローバルヘルス専攻にて公衆衛生学の専門職修士課程(Master of Public Health)に在籍しております。私は既に政治学(法学)分野で博士号を取得しておりますが、研究対象として国際保健分野を専門的に扱うにあたり当該分野の詳細な知識を獲得すること、特に定量的な分析手法について十分な基盤を作ること、大学院に関連したリソースを利用して国際保健に関する「実学的な」研究や勤務を行うことを目的として留学を決めました。

大学院では統計学(疫学・生物統計学)を始めとした幅広い授業を受講するとともに、遠隔医療に関する様々な基準の国際的な調和化の過程に関する研究や、大規模感染症対策のシミュレーションとその分析を行っております。後者に関しては、ハーバード大学が擁するグローバルヘルスに関するシンクタンクである Harvard Global Health Institute (HGHI)で勤務し、マサチューセッツ州を中心に感染症発生時の情報共有のシステムの構築や、各機関の連携行動についての研究などを行っています。

尊敬する先生方・先輩のフェローや同僚、そして様々な背景を持った多くの国からの留学生を含む優しい同級生たちに恵まれ、楽しい研究生活を送らせていただいています。

## ボストンでの生活

私は昨年ワシントンDCにて勤務をしておりました、その街並みや雰囲気などが非常に好きだったためボストンに来る際には正直に申し上げるとやや寂しい気持ちでいたのですが、実際に住んでみるとボストンの街並みの美しさや、大学街のアカデミックながらリラックスした雰囲気にも魅了されました。

特にやはり秋の紅葉は非常に美しく、街全体が赤と黄色に染まり、空はくっきりと晴れた秋というよりむしろ冬の澄んだ空気の作る青、というコントラストが見られる期間がしばらくあり、大学院までのちょっとした道まで楽しかったことをよく覚えております。その時期が終わりますと、12月に入るか否かという時期から街中すっぴりクリスマス飾りつけで、どこに行ってもイルミネーションが美しく、慌ただしい大学院生活ではありますが週末には友人たちと街中まで足を延ばすのがいつも楽しみでした。

また、ボストンは「学術都市」としても有名ですが、ハーバード大学や、マサチューセッツ工科大学、タフツ大学、ボストン大学など様々な大学が至近距離にあり、大学相互の単位互換なども盛んで、興味があれば相当に多くの分野について多様な視点から専門的な授業を受けることができる点も魅力的だと思います。大学ごとに雰囲気もかなり異なり、友人を訪ねて別の大学にお邪魔して授業の様子を教えてもらうとともにランチ等をするのも楽しみの一つでした。



上：大学院のクラスのうちの一つ、最終授業にて  
下左：大教室での授業の様子  
下右：大学院の新年のパーティーにて



## 「多様性」と「平等」のあり方

日本にいたころからよく考えることではありましたが、留学先ではより頻繁に、また差し迫ったテーマとして「多様性」と「平等」の在り方を考える機会が多くなったように思います。

卑近な例ではありますが、同質性が高いはずの大学院の様子一つからも感じられるものはあります。大学院にはかなりの数の学生が途上国から留学生として来ていますが、そのうちの相当数が、経済的に極めて厳しい環境から、アメリカを中心とした先進国の奨学金を得て留学しています。才能に恵まれても、多くの学生が村から出ることができない、私は単に幸運だったと酔うたびに話す友人の横には極めて裕福なことで知られる篤志家の子供である友人がおり、またその横にはごく平均的なアメリカの家庭で育ち、これから重いステューデント・ローン返済する予定の友人がいます（似た条件の彼の友人たちは経済的な理由で私立大学への進学を諦めたといいます）。また、仲間内でも授業でもしばしば話題になったのは、ハーバード大学の入試における「アジア系差別」の問題でした。これは、アジア系に対して大学側が入学時に不当な点数調整を行っていたのではないかとするものです。

私はこれらの様子や、あるいは問題に対してここでは何らかの意見を申し上げる意図はありません（特に、前者の「様子」については、多様な論点があり、多くの方が

異なった感想を持たれると思います）。ただ、日々切実に感じることは、ほぼ全ての問題について完全な解—特に完全な意味において「中立的な解」—はなく、常に様々な「正しさ」の生身のぶつかり合いによってある意味暫定的な解が導かれているということです。日本でもこれは全く変わりませんが、多様性への向き合い方が場合によっては国の方向性自体を規定するアメリカにおいて、そのぶつかり合いの激しさや、背後にある戦略や、逆にあからさまな諦観などをよく見ることができたことは自分にとって特別な意味がありました。特に、『『正しさ』は単に与えられるものではない』という覚悟やその主張を通すための「戦略性」が社会全体に深く根差していることと、その一方で同時に極めて固定化した価値観や階層性が存在するという事実が、ある種のギャップであるように見えてつ実は表裏一体であるという点が改めて肌で感じられたように思い、個人的に興味深く感じました。

## 御 礼

ボストンでの留学および研究の経験は様々な意味で得難いものになっていると日々感じます。この度の留学に際しましてご支援をいただきました KDDI 財団および関係者の皆様に、改めましてあつく御礼申し上げます。

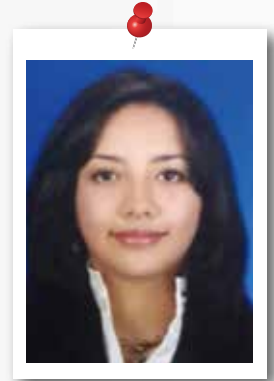


# Environmental Economics, Macroeconomic Analysis Based Hydroclimatological, Geological, Landscape Changes Produced By The Contamination Of Coal And Gold Mining.

神戸大学大学院 人間発達環境学研究所

**Paula Andrea Cano Bernal** (コロンビア)

パウラ アンドレア カノ ベルナル



## 1. INTRODUCTION

Water is becoming, increasingly, a factor of worldwide conflict and Colombia is one of the best examples of this situation because of its current environmental issues.

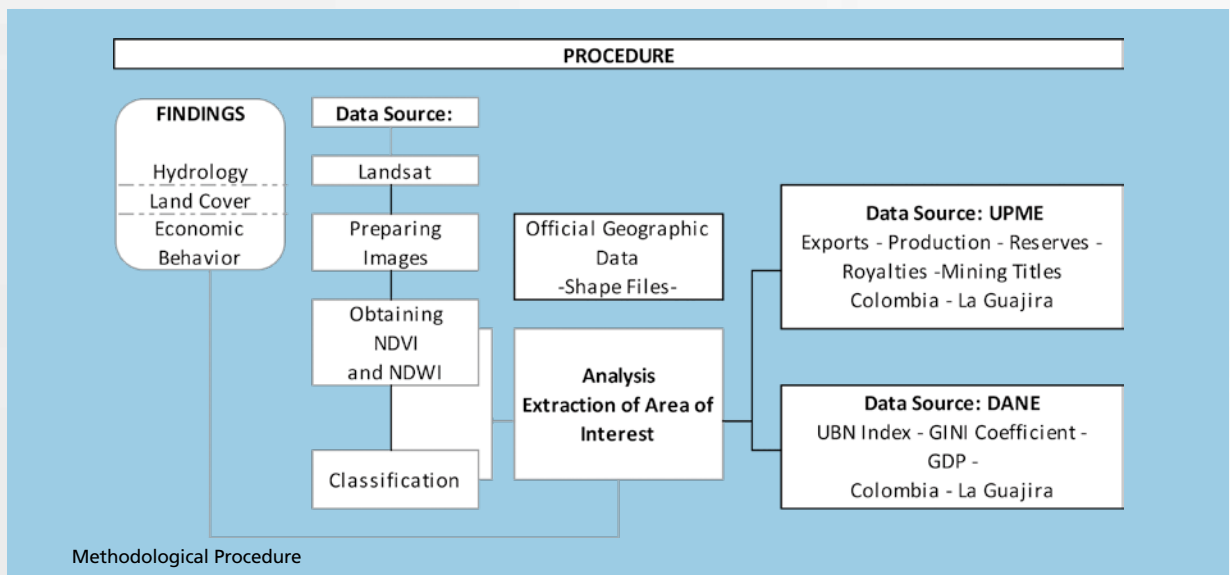
This research analyzes the economic impact of the exploitation of coal as an energy resource in La Guajira Colombia's social development at a national and local level. This region is a rich region, despite being facing a severe water supply crisis, as it is one of the regions that receives the most revenue from coal exploitation royalties.

This research is based on an interdisciplinary approach, to be able to have a complete context in order to develop the analysis of the environmental economic impact; this approach includes evaluation

of technical information in the area of hydrogeology and environment and information of economic behavior at the macroeconomic level with analysis of Colombia's GDP, and the real behavior of the economy within the villages. This approach should give us a complete perspective to carry out the evaluation of the paradox of abundance or curse of resources.

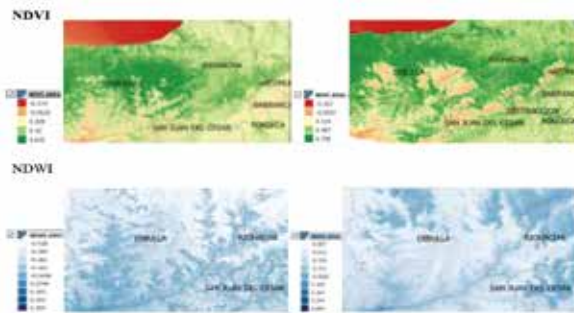
## 2. METHODOLOGY

The measurement of the impact caused by La Guajira's mining industry activity will be developed analyzing the economic and environmental behavior and its impact on the communities located in the different municipalities of the prefecture.



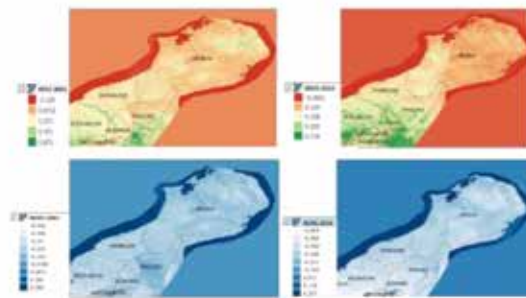


## MOORLAND



Map-NDVI and MDWI in Moorland Area

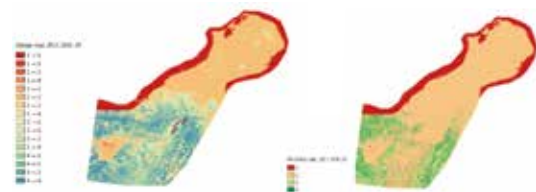
## DESERT



Map-NDVI and MDWI in Desert Area

## 3. RESULTS

The open-source GIS software was used and for the measurement of the land use change is done by using Molusce (Modules for Land Use Change Evaluation), a tool that applies Setting Artificial Neural Network (Multilayer Perception) for the model and Cellular Automata Simulation for the Forecasting. Percentage analysis of landscape change. It summarizes all the spatial analysis of projection of scenarios performed. It is important to convey that the future projection of the same area of mining extraction with reforestation activities and with the participation of active economies other than mining was raised as an analysis scenario. The results are encouraging, as it is evident that Vegetation Cover went from 12% to 66% in 2026, likewise, other described coverage presents an increase.



Map of change area between 2013 and 2016 Forecast Map 2026

## 4. CONCLUSION

The benefits of the use of temporal series of satellite images in the evaluation of changes in soil moisture, water saturation and water quantity for vegetation cover and water bodies are evident.

It is also evident that the constant degradation of water bodies and soil cover caused by open pit coal mining in La Guajira directly affects the quality of life of its inhabitants.

Ecosystem recovery is possible by continuing with the

same area of mining extraction with simultaneous activities of reforestation, this finding allows the analysis of policies for mitigation of environmental damage and proposes alternatives to economic activities other than mining.

## 5. PUBLICATIONS

Publication of the research at the World Water Congress & Exhibition 2018 Tokyo -Japan:

**IWA:** [http://worldwatercongress.org/wp-content/uploads/2018/09/IWA\\_WWCE\\_Tokyo\\_2018\\_Poster-List.pdf](http://worldwatercongress.org/wp-content/uploads/2018/09/IWA_WWCE_Tokyo_2018_Poster-List.pdf)

## 6. FUTURE WORK

The implementation of the methodology used will be continued in the Doctoral course phase in 神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 .



| IWA World Water Congress & Exhibition |                                                  |                        |                              |
|---------------------------------------|--------------------------------------------------|------------------------|------------------------------|
| 16-21 SEPTEMBER 2018 TOKYO, JAPAN     |                                                  |                        |                              |
| STAND B                               | MINISTERIO DE AGRICULTURA, GANADERIA Y PESQUERIA | TEL: +54 11 5203 11 30 | MAIL: IWA@AGROPECARIA.GOV.AR |
| STAND C                               | AGUA Y OCEANOS SUSTENTABLES Y OCEANOS AZULES     | TEL: +54 11 5203 11 30 | MAIL: IWA@AGROPECARIA.GOV.AR |
| STAND D                               | AGUA Y OCEANOS SUSTENTABLES Y OCEANOS AZULES     | TEL: +54 11 5203 11 30 | MAIL: IWA@AGROPECARIA.GOV.AR |



# ネパール地方部における 医療×ITの挑戦

特定非営利活動法人 ASHA 代表理事  
任 喜史 Yoshifumi Nin



## 1. はじめに

ASHAは、“Basic health rights”（健康に暮らす権利）がどこに住んでいたとしても普遍的に保証される世界の実現をビジョンとして掲げ、現在は後発開発途上国の一つであるネパールの、特に医療の行き渡らない地方部で活動している。地域の医療ニーズを可視化し、保健医療サービスの改善を支援することで、現地の人たちにとって手の届く、継続的なヘルスケアへのアクセス（Affordable and Sustainable Healthcare Access:ASHA）向上を目指している。

## 2. 背景

日本をはじめとする先進国との差はもとより、ネパールでは、国内におけるヘルスケアへのアクセスの格差が大きい。背景には医療資源（人的資源・薬剤などの物的資源・経済的資源）の不足があると考えられるが、量的な不足に加え、適切な配分がなされていないことにより発生している側面も大きい。医療資源不足は共通認識である一方で、“何が最も足りていないか”“限られた資源で何をすべきか”については地域の施策立案者も医療者も把握できていない。その理由の一つとして、ネパールでは医療情報が全て紙ベースでの管理であることに加え、患者側がカルテを持ち帰るため、医療提供側が受付の台帳レベルでしか情報を保有していないことが挙げられる。

## 3. 活動

そこで、ASHAでは電力などの各種インフラが整っていない地方部の医療機関においても使用できる医療情報管理ツールを提供し、医療機関側も情報を保持できる体制の構築を支援している。医療情報を保持できていないことは、履歴に基づいた診療や医療者間連携の

ハードルにもなっており、それらの課題の包括的な解決を目指す。今回、KDDI 財団様に助成いただいた事業では、地方部の2病院において、ツールを導入すると同時に、現状やニーズを常に可視化することを目指す。さらに、それに基づき必要な医療資源を再検討し、予防を含め、地域の健康改善のためのサービスを設計するためのアクションプランの共創を目的とする。

## 4. 経過

本稿では二つのプロジェクト実施地のうち、比較的順調に進行している Manmohan Memorial Community Hospital（以下、MMCH）における経過と現時点での成果を報告する。

MMCHは首都・カトマンズから1.5～2時間程度の郊外にあるコミュニティ病院（公的資金でなく寄付などで運営されているが公的な性質を有する）である。常駐医師3名と10名程度の医療スタッフにより運営されており、外来部門のほか、5床程度の入院施設や救急部門を併設している地域の基幹病院となっている。

同病院の理事長である Shashi 氏が、医療情報を病院側で保有していないことに対して危機感を抱いていたことが本プロジェクトを開始するきっかけであり、理事長および管理部門が主導となり事業を開始した。本プロジェクトでは、病院のサービスのうち、外来患者の医療情報を電子化することが目標である。電子化することで、簡易に集計、可視化できるようにし、病院サービスの改善やMMCHが積極的に取り組んでいる公衆衛生活動につなげていくことを目的としている。

事業開始にあたっては、情報入力・管理業務を一気に紙ベースから電子記録に変更するのではなく、まずは後の分析に必要な基礎情報および診断・処方内容の電子化から進めることとした。ITシステムの導入はそれまでの業務オペレーションを大幅に変えてしまうため、スタッフに抵抗なく使い始めてもらえるには時間はかかるが、



受付におけるデータ入力の様子。紙カルテの内容と比較しながら入力を開始した。

一歩ずつ電子化する方針を取った。後述の通り、診察室における情報入力は担当者設置により完了し、現在、検査室および受付の切り替え作業を進めている状況である。

## 5. 今回のプロジェクトの特徴

今までのプロジェクトにおいて、最も大きなハードルとなるのは現場スタッフ（主に医師）が現状からの変更に対し、「自分はすでにうまく回しているため変更の必要はない」「業務量が増える」と抵抗感を示すことであった。確かに、電子化は、いわゆる臨床に寄与する点も多いが、公衆衛生的な側面も強く、“ニーズの可視化”による利点をイメージしづらい上、移行期に紙ベースと電子ベースの二重入力が生じることは大きな課題であった。そこで、今回の事業においては、MMCHの理事長や管理部門長との議論を重ね、下記の2点を実施した。

### (1) ヘルスキャンプ（1日簡易検診）を実施

医療情報を取りまとめ、可視化することを体験してもらうため、弊団体の現地顧問である病理専門医・Ramesh DhakwaとMMCHが連携し、子宮頸がんの1日検診を実施した。1日検診で受付～検査・診療までの全てのプロセスの情報管理を電子化し、電子化後の病院オペレーションを理解してもらうとともに、その結果を取りまとめ、簡易ではあるが分析することで、関係者間でプロジェクトが目指す状況の理解を促進した。

### (2) 情報入力担当の設置

移行期、特に細かな変更・改善が頻繁に発生する導入初期の混乱を避け、円滑に導入するため、多忙な医師に最初から情報の入力を求めず、情報入力担当を設置した。診療室で医師の横で情報をPCで入力し、改善点を洗い出すことで、医師が記録する情報を正確に取れるようにソフトウェアの改善を行った。現在、情報の円滑な入力は実施できるようになっている。今後、ある程度患者の履歴を閲覧できるようになり、医師自身がソフトウェアを使用することが医師にとって紙ベースよりも便利になった段階で、医師自身の入力へ切り替える予定である。

|                                       |                            |           |
|---------------------------------------|----------------------------|-----------|
| Has the patient had Pap smear before? | Yes                        | 48        |
|                                       | (Blank)                    | 35        |
|                                       | <b>Total</b>               | <b>83</b> |
| Contraceptive History                 | injection_depo-provera     | 11        |
|                                       | intra dermal implant       | 6         |
|                                       | none                       | 48        |
|                                       | oral contraceptive pills   | 2         |
|                                       | (Blank)                    | 12        |
|                                       | <b>Total</b>               | <b>83</b> |
| Symptoms                              | abnormal vaginal discharge | 23        |
|                                       | none                       | 45        |
|                                       | other symptoms             | 1         |
|                                       | pain abdomen               | 10        |
|                                       | (Blank)                    | 4         |
|                                       | <b>Total</b>               | <b>83</b> |
| Pap Smear Test                        | precancerous lesions       | 2         |
|                                       | need follow-up             | 3         |

ヘルスキャンプ（1日簡易検診）における患者の特徴と診察結果の一部。これらと比較、分析していくこと、今後の対策についての議論を実施した。

## 6. 課題と対応

### (1) 情報の量と利便性のトレードオフ

日本の電子カルテも同様ではあるが、様々な情報を収集しようとするほど、情報入力画面も作業も煩雑となり、障壁が高まる。医師にとっては様々な情報を収集できれば診療に貢献するため、項目を増やしたがる傾向がある一方で、ASHAとしては“誰でも簡便に使えるソフトウェア”を目指しているため、その妥協点は常に課題となっている。現時点では、可能な限り対応しつつ、情報入力を選択式にして簡単に入力できるように工夫するなど対応している。

### (2) 入力されたデータの質

様々なスタッフが情報を入力するため、大文字・小文字やタイプミス、表記ゆれなど入力された情報の質が一定ではなく、分析時には困難を伴う。極力選択式にしてデータの質を高めつつ、必要な情報が消えないように調整している。

## 7. 展望

今後に向けては、2018年度末までに情報入力の電子化を完了し、ASHAとしてはソフトウェア面での継続的サポートおよび、上記のとおり大きな課題である入力された情報の質の担保に向け、定期的なフォローアップによる現場スタッフ支援なども継続的に実施していく。ある程度分析に堪える情報が集まった段階で、分析・可視化およびそれに基づく各種活動の立案支援を行う予定である。

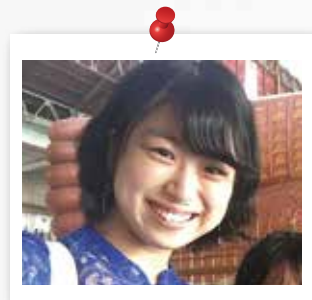


病院のメンバーと弊団体メンバー



# ミャンマーの社会の構造を知った 10ヵ月

東京外国語大学 言語文化学部 ビルマ語専攻  
小峰佳那子 Kanako Komine



こんにちは。東京外国語大学言語文化学部ビルマ語専攻の小峰佳那子と申します。私は、KDDI財団のご支援で、2017年11月から10ヵ月間、ミャンマーのヤンゴン大学ミャンマー国文学科に留学しました。そこでは、ミャンマー、ヤンゴンの大学生活を実際に体験し、学生たちと生活を共にすることで、彼等の価値観を知ることができました。また、後半の半年間は大学での勉強と平行してインターンシップにも参加し、様々な人々と関わることで、学生のみならず、幅広くミャンマーの人々の価値観を知ることができました。ここでは、現地での体験をメインに、留学前に考えていたこと、それをふまえて掲げていた留学での目標、留学を終えて現在考えていること、そして最後に、留学前後での自分自身の変化について触れたいと思います。

もともと、ビルマ語を学び始めるまでは、私はミャンマーに興味を持っているというわけではありませんでした。そのような中で、なぜ大学での専攻語としてビルマ語を選んだのかというと、将来ビルマ語を話すことができる人材の需要が高まるのではないかと考えたからです。私は言語を勉強することが好きで、だから東京外国語大学を受験したいと思うようになりました。そして、せっかく大学で専攻して勉強するのなら、将来その言語を使用して仕事をしたいと思っていました。そんなことを思っていたころ、ミャンマーでインフラが整い始めているという話を聞き、この先日本企業がミャンマーにどんどん進出して、ビルマ語を話すことができる人材の需

要が高まるのではないかと考え、ビルマ語を専攻したいと思うようになったのでした。

無事に東京外国語大学ビルマ語専攻に入学し、2015年8月に3週間ミャンマーに短期留学し、また、その後何度か旅行でミャンマーを訪れる中で、将来私はミャンマーとどのようにかかわっていくのが良いのだろうか、と考えるようになりました。そこで、10ヵ月の留学に行くことを決意しました。

そのため、留学では、ビルマ語の能力を磨くとともに、ミャンマーの人々が現在の生活の中で改善したいと感じている点と継承していきたいと感じている点を理解することを目標に掲げていました。私はミャンマーの文化に強い関心があったので、現地での生活をミャンマーの人々、特に学生たちと共にすることで、「文化」という概念を中心に、ミャンマーにおける社会の構造を知り、どのような形で構築されることがミャンマーの人々にとって一番理想的であるのか、ということ进行を明らかにすることで、理解を深めたいと思っていました。

しかし、実際に留学が始まって、現地での生活を学生たちと共に始めて気付いたことは、改善したい点・継承していきたい点を考えている人と考えていない人の差が激しい、ということでした。私はヤンゴン大学の学生たちが住む寮に住んでいたのですが、そこに住んでいる学生たちに聞いてみると、改善したい点・継承していきたい点がたくさんあってたくさん話してくれる学生もいれば、改善したい点は特になく今の生活のままでいい、

かといって継承していききたい点があるわけでもない、という学生もいました。留学中にKDDI財団が実施された学生向けアプリケーションコンテストでお手伝いをする機会をいただいたのですが、そのコンテストに参加していた学生たちはみんなしっかりと問題意識を持っていてどのようにしたら改善できるのかをしっかりと考えていて、驚かされたものでした。



アプリケーションコンテストにて

私は、もっとミャンマーの人々が感じていることを幅広く知りたいと思うようになりました。そこで、大学に通いながら、現地で知り合った人のもとで長期インターンシップを始めました。インターンシップでは、元々私が関心を持っていた流通の事業に関わらせてもらいました。主には、ミャンマー全国を飛び回り、現地の人々にミャンマー語でインタビューをし、ミャンマー国内の流通事情の調査をしました。調査していくと、農家、物流に関わる人々、小売り、など、流通にかかわる全てのステークホルダーがそれぞれの問題点を抱えてはいるものの、どのようにしたら改善できるのかが分からずそ

のままになってしまっていることが多い、ということを知りました。

10ヵ月間の留学生活を通して、ミャンマーの人々が感じていることを知るのみならず、ミャンマーにおける社会の構造への理解をとっても深めることができました。その中で、農家の人々が抱えている問題点が私にとっても印象が強く、わたしたちの食べているものを生産してくれている農家の人々がこんな問題点を抱えていたのか、と衝撃を感じたものでした。なので、今後は、彼らの抱えている問題点をどのようにしたら改善することができるのか、を考えていきたいと思っています。また、社会の構造への理解を深めたことを生かして、農家の人々と他のステークホルダーをつなぐことで、農家の人々が抱えている問題のみならず、他の人々が抱えている問題も解決できるようなことができればいいなと考えています。

留学生活を経て、ミャンマーの人々の抱えている問題点を改善できるようなことをビルマ語を使ってやりたい、とぼんやりと考えていたところを、少しだけですが、はっきりとさせることができました。最後になってしまいましたが、KDDI財団のご支援によって、今後の人生につながるこのような貴重な経験をすることができました。改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。この経験は絶対に今後に生かしたいと思っています。



流通調査で訪れた畑



流通事情の調査で訪れた先で仲良くなった友人たちと

## 2019 年度 助成対象者

### ● KDDI Foundation Awards 2018

| 受賞者                                                                                   | 研究成果                                                                                                       | 副賞金(千円) |
|---------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|
| <b>杉山 将</b> (すぎやま まさし)<br>理化学研究所<br>革新知能統合研究センター<br>センター長<br>東京大学大学院 新領域創成科学研究科<br>教授 | 現在主流の人工知能システムでは、コンピュータに人のような学習能力をもたせる機械学習の技術が用いられている。機械学習の数学的な基礎理論と実用的なアルゴリズムの開発、そして企業等と連携してその実世界応用を行ってきた。 | 2,000   |
| <b>高木 聡一郎</b> (たかぎ そういちろう)<br>国際大学<br>グローバル・コミュニケーション・センター<br>教授                      | 情報技術が企業組織構造の変化を通じて経済全体に与える影響の分析に取り組んできた。オフショア・アウトソーシングやクラウドソーシングなどを対象として、統合的な分析を行い、国際的な発表を行っている。           | 2,000   |
| 合計                                                                                    | 2件                                                                                                         | 4,000   |

### ● KDDI Foundation 奨励賞

| 受賞者                                                                        | 研究成果                                                                                                       | 副賞金(千円) |
|----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|
| <b>西山 大樹</b> (にしやま ひろき)<br>東北大学大学院 工学研究科<br>通信工学専攻 通信システム工学講座<br>通信方式分野 教授 | 移動通信端末間の直接通信の効率を飛躍的に向上させる技術を創出した。研究成果は論文・特許・ITU-T/AWG 寄書等で発表され、技術移転により商用化され、防災通信システムの一部として自治体に導入されるに至っている。 | 500     |
| 合計                                                                         | 1件                                                                                                         | 500     |

### ● 特別枠調査研究助成 (\* KDDI 財団設立 10 周年記念 特別助成)

| 研究者                                                      | 研究テーマ / 研究サマリー                                                                                                   | 助成期間                             | 助成金額(千円) |
|----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|----------|
| <b>上床 輝久</b> (うわとこ てるひさ)<br>京都大学 環境安全保健機構<br>健康科学センター 助教 | <b>スマートフォン認知行動療法の効果機序解明</b><br>スマートフォンアプリを用いた認知行動療法の5つの構成要素それぞれの効果を検証するために、閾値下うつ状態にある大学生を対象に、完全要因ランダム化比較試験を実施する。 | 2019年4月1日～<br>2021年3月31日<br>(2年) | 10,000   |
| 合計                                                       |                                                                                                                  | 1件                               | 10,000   |

### ● 調査研究助成

| 研究者                                                                            | 研究テーマ / 研究サマリー                                                                                                                           | 研究期間                             | 助成金額(千円) |
|--------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|----------|
| <b>秤谷 隼世</b> (はかりや はやせ)<br>京都大学<br>大学院医学研究科・医科学専攻<br>博士後期課程                    | <b>タイ王国の薬剤耐性菌問題の解決に向けて</b><br>タイ王国における薬剤耐性菌問題の解決を目的とし、①下痢症、風邪症候群の時のセルフメディケーションのための原因予測チャットボットの開発<br>②ミクスドメソッドによる一般家庭内における残薬の調査研究を行う。     | 2019年4月1日～<br>2020年3月31日<br>(1年) | 1,000    |
| <b>中川 聡</b> (なかがわ さとし)<br>東京大学<br>大学院情報理工学系研究科<br>知能機械情報学専攻<br>修士1年            | <b>見守りロボットのための QoL 推定システム</b><br>HRI に関する研究として、高齢者福祉で活躍する見守りロボットに自然対話を通じた QoL 推定を実現させる。さらにインタラクティブなロボットとの長期的な関係構築による、ユーザの社会活動への影響の評価も行う。 | 2019年4月1日～<br>2020年3月31日<br>(1年) | 1,000    |
| <b>小笠原 泰弘</b> (おがさはら やすひろ)<br>国立研究開発法人<br>産業技術総合研究所<br>ナノエレクトロニクス研究部門<br>主任研究員 | <b>ウェアラブルのための低電力な曲がる回路</b><br>人が「着る」ものに ICT のシステムを埋め込む将来像を考え、フレキシブル基板向け低電力回路の研究を行い、設計環境を構築する。現行主流の固くかさばる PCB 基板よりも、システムの自由度を大きく拡大する。     | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年) | 3,000    |
| <b>金 ミンソク</b> (きむ みんそく)<br>新潟大学<br>工学部・電気電子工学科<br>准教授                          | <b>電波による住環境データ化と環境情報同定</b><br>スマートホームの実現に向けて、マイクロ波・ミリ波を用いた住環境の高分解能データ化を行い、もっとも基本的な環境情報である居住者の存在有無、居場所、行動や状態を高精度で同定する手法を開発する。             | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年) | 3,000    |

| 研究者                                                                      | 研究テーマ／研究サマリー                                                                                                                              | 研究期間                                | 助成金額(千円) |
|--------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------|----------|
| 岡本 英二 (おかもと えいじ)<br>名古屋工業大学<br>大学院工学研究科<br>電気・機械工学専攻<br>准教授              | <b>自動運転用 V2X 性能予測と低遅延化技術の構築</b><br>セルラ V2X を用いた自動運転用ローカルダイナミックマップ伝送の性能向上のために、モバイルエッジコンピューティングを活用し、無線伝送性能予測と低遅延伝送が可能なスマート V2X 予測システムを構築する。 | 2019年4月1日～<br>2021年3月31日<br>(2年)    | 3,000    |
| 岩居 健太 (いわい けんた)<br>立命館大学<br>情報理工学部 情報理工学科<br>画像・音メディアコース<br>特任助教         | <b>非線形再帰フィルタの拡声通話機器への応用</b><br>テレビ会議システム等の拡声通話機能は、テレワークなど多様な働き方を支援する上で必須である。本研究では、出力部であるスピーカの非線形性を補償するエコーキャンセラを研究し、エコー抑圧性能の改善を図る。         | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年)    | 2,570    |
| 李 吉屹 (り じい)<br>山梨大学<br>大学院総合研究部<br>特任助教                                  | <b>マルチタスク学習による論文の採否自動判定</b><br>本研究は、学術論文の採否判定を新規性や明瞭性など複数の評価項目から成るマルチタスクと仮定し、アテンション機構による CNN を用いたマルチタスク学習により論文の採否を自動的に判定するシステムを開発する。      | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年)    | 3,000    |
| 鷺沢 嘉一 (わしざわ よしかず)<br>電気通信大学大学院<br>情報理工学研究科情報・ネットワーク工学<br>専攻<br>准教授       | <b>介護の見える化：タッチングケア効果の評価</b><br>高齢化問題に対して効果的な介護ケアの開発が重要である。我々の研究では、タッチングケアがストレス低減効果を生むことを示した。この効果を見える化し、介護現場に利用できるシステム作りをフランスと共同で行う。       | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年)    | 3,000    |
| 今井 喜胤 (いまい よしたね)<br>近畿大学<br>理工学部・応用化学科<br>准教授                            | <b>ICTによる食糧増産のための LED 開発</b><br>食の安定供給を目指した魚の養殖・水耕栽培が注目されているが、最大の欠点は、餌代・照明代のコストである。そこで CP-OLEDs を開発し、餌となる魚の集光特性・植物成長促進特性により、生産性を向上させる。    | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年)    | 3,000    |
| 小峰 啓史 (こみね たかし)<br>茨城大学<br>大学院工学部付属グリーンデバイス教育<br>研究センター<br>副センター長        | <b>情報記憶装置製造のための高速サーボ記録</b><br>ビッグデータ時代到来により情報記憶装置を供給し続けることが ICT の発展に欠かせない。本研究では、主要な記憶装置であるハードディスクの生産性を飛躍的に向上させる超高速サーボ信号記録方式の実用化を目指す。      | 2019年4月1日～<br>2021年3月31日<br>(2年)    | 3,000    |
| 李 洪譜 (り こうふ)<br>静岡大学<br>工学部機械工学科<br>教授                                   | <b>螺旋状ファイバ回折格子の開発とその応用</b><br>本研究では、異なる OAM モードを有する螺旋状多チャンネルファイバ回折格子の新しい設計法と作製法を開発し、そして波長および OAM モード多重光通信のための多波長 OAM モード多重デバイスへの応用を目指す。   | 2019年4月1日～<br>2021年9月30日<br>(2年6ヵ月) | 3,000    |
| 三友 仁志 (みつとも ひとし)<br>早稲田大学<br>国際学術院 大学院アジア太平洋研究科<br>教授                    | <b>「コネクテッド」の社会実装研究</b><br>相互依存性は、次世代通信、データ、AI に基づくサービスがもつ本質的特性である。その経済学的特性を分析し、普及が期待されている自動運転を事例に、社会プラットフォームの実装に資する政策を提言する。               | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年)    | 3,000    |
| 白石 優子 (しろいし ゆうこ)<br>国立研究開発法人理化学研究所<br>脳神経科学研究センター<br>親和性社会行動研究チーム<br>研究員 | <b>アプリを活用した買い物嗜癖の支援的研究</b><br>これまで実態把握や支援の難しかった買い物嗜癖・金銭管理の問題に対し、スマホアプリを活用した生活・買い物記録と実験により、嗜癖のサイクルや行動パターン、認知特性を明らかにし、その支援策を検討する。           | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年)    | 3,000    |
| 高橋 利枝 (たかはし としえ)<br>早稲田大学<br>文学学術院<br>教授                                 | <b>AI/ ロボットの利活用に関する国際比較</b><br>本研究は超高齢化、人口減少によって直面する課題を解決するために、AI/ ロボットの利活用に関する国際比較調査を行うものである。研究を通して社会的便益性の高い AI/ ロボットのイノベーションを促進したい。     | 2019年4月1日～<br>2021年3月31日<br>(2年)    | 3,000    |
| 上山 憲昭 (かみやま のりあき)<br>福岡大学<br>工学部 電子情報工学科<br>教授                           | <b>情報指向ネットワークの普及促進制度の研究</b><br>情報指向ネットワーク (ICN) の効果は ICN の普及度合いに依存する。本調査研究は ICN の導入が ISP の利益に与える影響を定量的に分析し、ICN の普及促進のための効果的な制度を明らかにする。    | 2019年4月1日～<br>2022年3月31日<br>(3年)    | 3,000    |
| 白崎 護 (しらさき まもる)<br>関西外国語大学<br>外国語学部・英米語学科<br>准教授                         | <b>公職選挙法の改正が有権者におよぼす影響の解明</b><br>次回参院選時の世論調査に基づき、「公示期間中、複数の政党の HP やソーシャルメディアと接した場合、主に特定の政党のそれらと接した場合よりも、自身と異なる政治的意見への寛容性が高まる」との仮説を検証する。   | 2019年4月1日～<br>2021年3月31日<br>(2年)    | 3,000    |
| 合計                                                                       |                                                                                                                                           | 16件                                 | 43,570   |

## ● 日本人留学生助成

| 助成対象者                                                   | 研究テーマ／研究の概要                                                                                                               | 留学先(予定) | 助成期間 | 助成金額(千円) |
|---------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|------|----------|
| 佐々木 謙一 (ささき けんいち)<br>東京工業大学大学院<br>工学院機械系機械コース 修士2年      | <b>広角地球カメラを用いたオンボード画像識別</b><br>衛星搭載計算機でリアルタイムに地上画像を識別・分類を行う。これは、開発中の地球センサのミッションの一つであり、画像識別結果から衛星の姿勢決定や自律的な特徴量抽出を行うことができる。 | アメリカ    | 2年   | 4,800    |
| 成田 穂 (なりた みのり)<br>東京大学大学院<br>新領域創成科<br>学研究所複雑理工学専攻 修士2年 | <b>End-to-End 学習による汎化型強化学習</b><br>End-to-End 学習や逆強化学習を用いて汎化型強化学習の実用化に貢献し、より高度な人工知能技術の実現をサポートする。                           | アメリカ    | 2年   | 4,800    |
| 合計                                                      |                                                                                                                           |         | 2件   | 9,600    |

\*別途支援金 5,000千円/人

## ● 外国人留学生助成

| 助成対象者                                                                               | 研究テーマ                                                                                                                                 | 国籍      | 助成期間(月数) | 助成金額/年(千円) |
|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|----------|------------|
| Paul Hannibal (ポール ハンニバル)<br>立命館大学大学院<br>理工学研究科 博士1年                                | Aerial Maneuvering in a Cluttered Environment using Onboard Manipulator Systems                                                       | インド     | 12       | 1,200      |
| Nguyen Minh Tri (グエンミン トゥリ)<br>九州工業大学大学院<br>情報工学府 博士1年                              | Distributed Monitoring and Management for Scalable and Resilient SDN                                                                  | ベトナム    | 12       | 1,200      |
| Umme Aymun Siddiqua (ウム アイマン シッディカ)<br>豊橋技術科学大学大学院<br>工学研究科 修士1年                    | Stance Detection on Microblog Focusing on Syntactic Tree Kernel and Deep Neural Network based Architectures                           | バングラデシュ | 6        | 600        |
| Ung Quang Huy (ウン コアン フィ)<br>東京農工大学大学院<br>工学府 情報工学専攻 修士2年                           | 手書き数式認識とクラスタリング                                                                                                                       | ベトナム    | 12       | 1,200      |
| Boliko Charles Mbuli (ボリコ チャールズ ヌンプリ)<br>京都大学大学院<br>総合生存学館 博士2年                     | Assessment of rural electrification activities in Kenya using a sustainability assessment framework                                   | コンゴ     | 12       | 1,200      |
| Bui, Duong Ha (ブイズウオンハ)<br>北陸先端科学技術大学院大学<br>先端科学技術研究科 博士2年                          | IoT Enabled Human-Robot Interaction in Smart Home Environment                                                                         | ベトナム    | 12       | 1,200      |
| Narksri Patiphon (ナルクスリ パティホン)<br>名古屋大学大学院<br>工学研究科 修士2年                            | 3D-LiDAR-based real-time ground segmentation for Autonomous Vehicles                                                                  | タイ      | 12       | 1,200      |
| Ruriana Nafilah Anggraini (ルリアナ ナフィラ アングライニ)<br>京都大学大学院<br>アジア・アフリカ地域研究研究科 博士1年     | The New Rise of Middle-Class in Jakarta: Consumption and Social Media                                                                 | インドネシア  | 12       | 1,200      |
| Cariaso Megan Alexandra Homeres (カリアン メーガン アレキサンドラ ホメレス)<br>上智大学大学院<br>地球環境学専攻 修士1年 | The Peril at Pamlico Nursery: Exploring the Applicability of Suruga Bay's Resource Management System and the Modification of Trawlers | フィリピン   | 6        | 600        |
| Sato Fred Emmanuel (サトー フレッド エマニュエル)<br>上智大学大学院<br>総合人間科学研究科 修士1年                   | Impact of Democracy on Educational Policies in Malawi                                                                                 | マラウイ    | 12       | 1,200      |
| Takinana Anuantaeka (タキナナ アヌアンタエカ)<br>京都大学大学院<br>地球環境学舎 修士1年                        | Climate Change Education and Communication: Integrating Science and Traditional Knowledge for Community Resilience in Fiji            | フィジー    | 12       | 1,200      |
| 合計                                                                                  |                                                                                                                                       |         | 11件      | 12,000     |



## ● 語学留学助成

| 助成対象者                                      | 留学先 / 専攻       | 助成金額(千円) |
|--------------------------------------------|----------------|----------|
| 田守 彩香 (たもり あやか)<br>東京外国語大学 言語文化学部ビルマ語専攻 3年 | ヤンゴン大学 ミャンマー学科 | 500      |
| 合 計                                        | 1 件            | 500      |

\*別途支援金 50千円

## ● 社会的・文化的諸活動助成

| 団体名                                 | 活動の名称 / 活動の要旨                                                                                                                                   | 活動時期 / 活動場所                             | 助成金額(千円) |
|-------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|----------|
| 芝浦工業大学<br>色彩・コミュニケーション<br>デザイン研究室   | <b>カラーデジタルアート x 照明 国際シンポジウム・ワークショップ</b><br>IT 技術活用と創造性をテーマとしたハンズオン教育を通じ育成してきた、地域の発展に貢献するリーダー 12名の継続的支援を図るとともに、彼らを中心としてさらに次のリーダーを育成するための教育ハブを作る。 | 2019年5月1日～<br>2020年3月31日<br>東京、バンコク     | 960      |
| NPO 法人<br>アクティブ SITA                | <b>子供のプログラミング学びの普及推進活動</b><br>将来の AI 時代を担う子供たちはプログラミング/コンピュータに自律的に立ち向かうリテラシーを早くから育む必要がある。そうしたリテラシーを育むため、子供たちの生活する場でプログラミング学びを推進する。              | 2019年4月1日～<br>2020年6月30日<br>町田市         | 999      |
| NPO 法人<br>ファクトチェック・イニシアティブ<br>(FIJ) | <b>情報の正確性を検証するファクトチェックに参加できるアプリの開発</b><br>事実に基づかない言説(誤情報やフェイクニュース)に惑わされにくい社会を作るために、情報の正確性を一般の人々が手軽にチェックしたり、情報共有できる仕組みを作る。                       | 2019年4月1日～<br>2020年6月30日<br>東京都         | 1,000    |
| 上智大学<br>アジア人材養成研究センター               | <b>アンコール・ワット西参道修復工事への3次元測量技術の応用研究</b><br>アンコール・ワット西参道修復工事に3次元レーザースキャナーによる測量技術を適用して、遺跡修復記録の保存・活用技術を検討・整備する。情報処理技術を活用した新たな遺跡修復工法の標準化を目指す。         | 2019年4月1日～<br>2020年3月31日<br>東京、シェムリアップ市 | 1,000    |
| 合 計                                 | 4 件                                                                                                                                             | 3,959                                   |          |

## ● 継続型社会的・文化的諸活動助成

| 団体名                                | 活動の名称 / 活動の要旨                                                                                                                                               | 活動時期 / 活動場所                             | 助成金額(千円) |
|------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|----------|
| EDAYA                              | <b>フィリピン農村若者リーダー育成に向けた、IT 技術活用と創造性がテーマの教育ハブ作り</b><br>IT 技術活用と創造性をテーマとしたハンズオン教育を通じ育成してきた、地域の発展に貢献するリーダー 12名の継続的支援を図るとともに、彼らを中心としてさらに次のリーダーを育成するための教育ハブを作る。   | 2019年4月1日～<br>2021年3月31日<br>フィリピン・バギオ   | 2,000    |
| 一般社団法人<br>Cycle Beyond the Borders | <b>ICT を活用したオンライン授業によるカンボジアの高校生向け受験科目の制作と普及</b><br>現地で最も人気のサービスである YouTube を活用し、無料の映像授業を提供する。英語教材は言語の壁/カリキュラムや教え方の違いにより普及しておらず、カンボジア人によるカンボジア人のための教育支援を目指す。 | 2019年4月1日～<br>2021年3月31日<br>カンボジア・プノンベン | 2,000    |
| 合 計                                | 2 件                                                                                                                                                         | 4,000                                   |          |

## ● 国際会議開催助成

| 申請団体                                                                | 会議の名称                                                                                          | 主催団体名                                                                                                                                                            | 助成金額(千円) |
|---------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| 国際会議 ISCAS2019 組織委員会                                                | <b>2019年 IEEE 回路とシステムに関する国際会議</b><br>2019 IEEE International Symposium on Circuits and Systems | 国際会議 ISCAS2019 組織委員会、<br>米国電気電子学会 (IEEE)、<br>回路とシステムソサイエティ、<br>回路とシステムソサイエティ日本合同チャプター、<br>回路とシステムソサイエティ福岡チャプター、<br>回路とシステムソサイエティ関西チャプター、<br>回路とシステムソサイエティ四国チャプター | 800      |
| IEEE International Conference on Computational Photography 2019 事務局 | IEEE International Conference on Computational Photography 2019                                | IEEE (The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc)                                                                                                | 800      |
| 合 計                                                                 | 2 件                                                                                            | 1,600                                                                                                                                                            |          |

## ● 著書出版助成

| 執筆者 / 所属                               | 出版物名                    | 出版予定時期   | 助成金額(千円) |
|----------------------------------------|-------------------------|----------|----------|
| 菊盛 真衣 (きくもり まい)<br>立命館大学<br>経営学部 准教授   | インターネット・クチコミと消費者行動 (仮題) | 2020年2月  | 2,000    |
| 寺田 麻佑 (てらだ まゆ)<br>国際基督教大学<br>教養学部 准教授  | 先端技術と規制の公法学 (仮題)        | 2019年12月 | 2,000    |
| 浅井 澄子 (あさい すみこ)<br>明治大学<br>政治経済学部 専任教授 | 書籍市場の経済分析 (仮題)          | 2020年3月  | 2,000    |
| 合計                                     |                         | 3件       | 6,000    |

## ● 海外学会等参加助成

| 参加者 / 所属                                                 | 参加学会名                                                                       | 開催時期 / 開催国                         | 助成金額(千円) |
|----------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|----------|
| 高口 紗矢香 (こうぐち さやか)<br>静岡大学情報学部 助教                         | Constructionism 2018                                                        | 2018年8月21日～<br>2018年8月25日<br>リトアニア | 457      |
| CHENG, John William<br>(チェン ジョン ウィリアム)<br>早稲田大学政治経済学部 講師 | 29th European Conference of the International<br>Telecommunications Society | 2018年8月1日～<br>2018年8月4日<br>イタリア    | 367      |
| 劉 佳 (りゅう か)<br>国立政治大学 (台湾)<br>コミュニケーション/メディア専攻<br>博士後期課程 | PTC (Pacific Telecommunications Council) 2019                               | 2019年1月20日～<br>2019年1月23日<br>アメリカ  | 308      |
| 合計                                                       |                                                                             | 3件                                 | 1,132    |

## KDDI Foundation Awards 2019のご案内

KDDI 財団では、ICTが拓く豊かな未来社会の実現を目指し、「ICTの普及・発展、グローバル化、ICTを活用した社会的課題の解決に貢献する優れた業績」を表彰するプログラムを設けました。

■ 応募対象 分野：技術、産業、制度、社会、文化、医療等広範囲の研究  
年齢：2020年3月31日時点で45歳以下であること

■ 採択件数と副賞金 KDDI Foundation Awards 2件 200万円 / 件  
KDDI Foundation 奨励賞 2件 50万円 / 件

■ 募集期間 2019年4月1日～2019年6月30日

\*詳細はKDDI財団ホームページをご覧ください。

▶ <http://www.kddifoundation.or.jp/award/>



## □ 調査研究助成

### (1) 対象

ICTが拓く豊かな未来社会をテーマに、ICTの普及・発展、グローバル化、ICTを活用した社会的課題の解決に寄与する調査、研究（技術、産業、制度、社会、文化等）を対象とします。日本の大学、高専、研究機関に属する研究者、ポスドク、大学院生が応募可能です。ただし、通信事業者等の本来業務に該当するものは除きます。

### (2) 助成金額等

1件あたり最高300万円まで。14件程度。（大学院生は100万円まで）

## □ 国際会議開催助成

### (1) 対象

情報通信の普及・発展に寄与する国際会議で、先端技術にかかる課題から法制度や政策・技術の利活用など、幅広い分野での会議を対象とします。ただし、通信事業者等の本来業務に該当する国際会議は対象外。2020年4月から2021年6月末までに開催される会議であること。

### (2) 助成金額等

1件あたり最高80万円まで。5件程度。

## □ 社会的・文化的諸活動助成

### (1) 対象

情報通信を利用し社会や教育等の発展に貢献する各種の「草の根」活動を重視します。地域社会の国際化につながるような各種の活動、通信を通じて社会に貢献する各種の文化事業、通信の普及・発展、あるいは国際間相互理解の促進に寄与する活動・事業、青少年を対象とした活動など（たとえば、イベント、講演会、ボランティア活動）。ただし、通信事業者や地方自治体等の本来業務に該当するものは対象外。2020年4月から2021年6月の間に実施されるもの。

### (2) 助成金額等

1件あたり最高100万円まで。5件程度。

### ● 申込受付：7月中旬（予定）

ホームページより所定の申込書をダウンロードし必要事項をご記入の上ご提出ください。申込書は毎年更新いたしますのでご注意ください。申込書が入手できない場合には、財団にご請求ください。

\*詳細はホームページでご案内いたします。

### ● 助成の採否

審査委員会の審査を経て、2020年3月に開催予定の理事会で採否を決定します。この際、助成希望金額は減額されることもあります。決定通知の金額で実施できないと判断されるときは、速やかに辞退を申し出てください。

### ● お問い合わせ・申込書請求・申込書送付先

公益財団法人 KDDI財団  
〒102-8460 東京都千代田区飯田橋 3-10-10  
ガーデンエアタワー 6F

E-mail: grant@kddi-foundation.or.jp

※お問い合わせはEメールで受け付けます

<http://www.kddi-foundation.or.jp>

## 外国人および日本人留学生への奨学プログラム（指定校制）

KDDI財団では、日本国内で学ぶ外国人留学生、海外での研究を志す日本人の留学生をサポートしています。いずれも当財団が指定する大学院に在籍し、学校より推薦された35歳以下の学生が対象です。

外国人留学生につきましては、情報通信関連の研究を進めていることを条件とし、月々10万円、最長1年間支給いたします。日本人の海外留学支援につきましては、ICT関連の研究を志す留学希望者を優先し、月額20万円（最長2年間計480万円）を支給いたします。

## 表紙イラストレーター紹介



### チウ・ヒーア

出身：シエムリアップ州ベンメリア地区  
生年月日：1987年5月30日  
学歴：ビルド・プライト大学経済学部 卒業  
職業：小さな美術スクール日本語通訳  
受賞歴：日本語スピーチコンテスト 優勝

ヒーアが絵を描き始めたのは約4年前、26歳の時。学校がKDDI財団よりカンボジア支援のチャリティーコンサートのポスターデザイン制作依頼を受け、その時初めて筆を持ちました。ヒーアは絵画作品を通して、「世界の平和と家族の絆、ぬくもり」を表現したいと考えています。彼が描く世界は学校やギャラリーを訪れる多くの外国人を魅了しています。

## 編集後記

今号はKDDI財団設立10周年記念号です。

歴代理事長による座談会では、時代の変遷を感じながらそれぞれの熱い思いを聞くことができました。また「10年のあゆみ」をまとめてみると、活動の幅広さや多様性にあらためて気づかされました。次の10年を思うとワクワクが止まりません。

今後ともよろしくお願いします。（理）

KDDI Foundation Vol.10

発行／2019年4月1日

編集・発行責任者／井上 正純

公益財団法人 KDDI財団

〒102-8460 東京都千代田区飯田橋3-10-10  
ガーデンエアタワー6F

Tel:03-6328-3030 Fax:03-6328-3053

Email: office@kddi-foundation.or.jp

<http://www.kddi-foundation.or.jp>

設立：2009年10月1日

